

オレ、あるいは獅子の騎士

冬霞@ハーメルン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

騎士王の名も高きアーサー王が治めるブリテンの国に、やがて獅子の騎士と讃えられることになる一人の若者がいた。

彼の太陽の騎士に伍する力を持つ彼の名は、サー・イウエイン。ウリエン王の嫡子にして円卓の末席に名を連ねる——オレである。

現代人の魂(前世)を持つ獅子の騎士、サー・イウエインの物語。獅子心王も寵愛した詩人、クレティアン・ド・トロワならば彼の活躍をどのように謳うだろうか。そんなお話。

目次

第0話	オレ、やがては獅子の騎士	1
第1話	オレ、あるいは仇討ちの旅路	13
第2話	妾、あるいは赤錆の騎士	27
第3話	オレ、あるいは泉の城の姫	38
第4話	僕、あるいは泉の城の若武者	50
第5話	オレ、やがては	59
第6話	オレ、あるいは花びらの騎士	72
登場人物紹介		84
第7話	オレ、ついに人形のごとき騎士	90

第0話 オレ、やがては獅子の騎士

——なんて、無様。

掠れた視界に映る光景に、引き攣るように自嘲する。これを望んでいたはずだったのに、どうしてこんなに酷い気分なのだろう。

俯せに倒れた五体は骨が抜かれたようで。指先だってピクリとも動かせやしない。

そんなのは、もうどうでもいいことだった。

この光景こそが己の望んだ終末で、このあと何がしたかったわけでもないのだと気がついたのはいつだったか。数多の騎士相手に、泥水の中で喋っているような気持ち悪さを堪えて弁舌を振るったときだったか。それとも、どくどくと魂の通貨が流れ落ちる、この傷を負ったときだったか。

どうしようもなく終わっている自分が可笑しくて……同じくらい、哀しかった。

こんなガキの癩癩に色んなものを巻き込んで、色んなものを終わらせて。それを由よしとしている自分。なんて浅ましくて、なんて無様。

でもそれが望みだったのだから。そして、それを果たしたのだから。

結局のところ、この己の存在価値は、そういうものだったのだろう。

(冒険とか、竜退治とか、してみたかったなあ……)

いや竜退治は今さっきしたばかりだったか。退治しきれたわけじゃあないが、とせせら囁う。

思えば騎士に叙勲されてこの方、どうにも悪かった運命の巡り合わせが呪わしい。城の中で剣の稽古をしたり、やたらと弁の立つ同僚にからかわれたり、豎琴を爪弾きながらの恋愛談義に付き合わされたり、過酷で困難だが、ちつとも華やかでない戦に出たり。

そういえばあの唐変木は己のこんな気持ちなんて知った風でなく、自らの冒険譚を聞かせてくれたものだった。今思えば、あの時の意趣

返しはもう少しキツイお仕置きにするべきだったか。

会わないとか離縁するとかじゃなくて、そう、アイツの方こそ湖の奥の城の中に閉じ込めてやったりとか。

(あるいは、例えば――)

一緒に連れて行ってもらったりとか。

：それはとても、魅力的な空想だった。もしも本当の望みなんてモノが他にあつたとしたら――或いは其れだったのかもしれない。

二人で轡を並べて旅し、冒険と浪漫を求めて宛てもなく進むのだ。神の導くまま、風の吹く先へ、雲の先の彼方へと。

毒の息を吐く邪竜や、人を喰らう巨人を退治するのもいい。神が、主が、妖精が、魔術師が残した神秘も見てみたい。

やがて親切な領主の城で一晩の宿を得て、その礼に美しく可憐な淑女の頼みを聞いて悪辣な騎士を倒す。あるいは道づれで挑戦者を求める勇敢な騎士と腕を競うのだ。

(――そんな夜には、少しは、褒美をくれてやったりって、いい)

でも、それは只の空想^{ユメ}。一度だって、そう望むことはなかった幻。

先ずあの母が許しはしないか。いや、そうじゃない。つまるところ自分は母から言われたままに、母の思うがままに過^ぎしてしまつて、今こうして此処で倒れ臥している。

その自分がどうして、こんなことを夢見られるものか。ありもしなかった、あるはずのないifなんて考えるものじゃあない。

「――だつつうのに、なあ」

屍が積み上がった、小高い丘。その丘のてっぺんから見える、這うようにこちらへ向かってくる一人の騎士の姿。

朝焼けのように眩かった鎧はヒビ割れ、欠けて、赤茶けて。相棒の

姿もなく、闇よりも昏い漆黒の剣を支えにゆっくりと。

近くまで来れば——嗚呼、なんて酷い。自分と同じ、もう助かるはずもない、死に体じゃあないか。嘗ては太陽の騎士と並び称され、讃えられた最高の騎士の一人が。

「モードレッド」

今そつちで呼ぶかよ。まあ、いいか。

ちやんと笑えただろうか。いつも通り、勝気に、強がって。

グシヤリと倒れ、並ぶように臥せた顔に浮かべた微笑み。あー、成る程ね。力が足りなくて、きつと己も同じような優しい微笑しか浮かべられなかったに違いない。

こつちは腹に大穴空けられて、口を開くのも億劫なのに、そつちの方は随分と余裕じゃあないか。どうせ直ぐに死んじまうんだろうけれど。まあ、地獄行きは自分の方が先か。

「酷いな、勝手に地獄行きにする、なんて」

考えていることを勝手に読むんじゃあない。

それにあれだ。この自分が地獄行きなのが確定なんだからさ、お前も一緒に来るのが当然なんだ。いつもフラフラしやがって、最後ぐらいはしつかり付き合え。

もつとも、そういえば此奴が身を落ち着ける気になってからは、今度は自分の方が騎士になって王城に上がってしまったんだっけか。似た者同士、どつちもどつちだな。

「それは、間違いないな。ああ、間違いない。あの時は本当に、すまなかった。約束するよ、今度は最後まで一緒に。払暁の喇叭が喚んでも、夜の帳が降りても」

齒の浮くようなセリフを言えなきや最高の騎士にはなれないのか。

あの太陽の騎士も、荷馬車の騎士も、糸目の弓騎士も、此奴も。

終ぞ自分には身につかなかった技術だ。どうにも言葉よりも剣の方が早くて便利で参る。そんなんだから……いや、そつちは特に問題はなかつたわけで。いや目の前の此奴の迷惑と不敬を考えれば、十分に問題ありだった。

「もう休みなさい、モードレッド。君は誰が止めたって走ることを止めなかつたから、もう走れなくなつた今は、ゆっくりとお休み」

僕も休むよ。君のために。僕の冒険の幕は此処で閉じよう。

そう言つて頭を撫でて、それで最後の力を使い果たして、静かに目を閉じた。

口は達者に回つたくせに、それで終わりか。満足そうに、先に逝きやがつて、己についてきて、好き勝手暴れて、本当に自分勝手な奴。

「……満足なんて、できるもんか」

そうだった。

子どもの癩癩で、此の様^{さま}で。自分は結局^{さいまつ}こうして全てをメチャクチャにして、その先がなくて。それが自分の存在価値だった。

けど本当にやりかつたことは？ 二人で過ごすことよりも、本当にやりたかつたことは？ この屍の丘の先に、本当にやりたかつたことは？

「——ああ、そうか。オレはただ」

それでも己は、此の身を懸けて証明したかつたんだ。

それが本当の本当にやりたかつたことなのかは分からないけれど。

先ずは、あの人に——

◆

「どうしたのかな、友よ。盃が乾いていないじゃあないですか。まだ宴は中頃といったところだというのに」

黄金と見まごうほどに磨き上げられた盃に満たされた葡萄酒を眺めていると、後ろから声が聞こえてきた。

輝く金髪、誠実な笑顔。太陽のような大らかさ、優しさ、そして強さを持った無二の親友が肴を持ってきてくれたらしい。——じゃがいもである。

「ガウエイン卿」

「おっと葡萄酒を吞まれていたか。ならば此方を。人参です」

「僕には色が違うだけの同じ物体に見えるのだが？」

「まさか！ じゃがいもはスパイシーな仕上がりですが、こちらは少し甘く煮てあります。このガウエイン、野菜の扱いに関してはキヤメロット随一。まずは御賞味あれ、そして感想を」

エールにはじやがいも、葡萄酒には人参。飽きるほど聞き飽きた友の主張に従い賞味する。

……うむ、悪くはない。悪くはないのだが友よ。ちよつと、その、飽きた。

確かに野菜を食べないと身体に悪い。それはとてもよくわかる。かといって、こう、君の調理法は変わりばえがしない上に工夫の為所が解りづらく……やっぱり端的に言って、せめて肉を持ってきて欲しかったかな！

「して、イウエイン卿。その無卿の理由や如何に？ かくも賑やかな宴に、そのように仏頂面ではご婦人方にも失礼と思いませんか」

「君ほど愛想よく過ぐすには、此の身は些か不器用でね。ともあれ言

いたいことは分かる。しかし聞いてくれガウエイン卿、僕は今とても飢えてるんだ。断じて野菜にはなくて」

「ほう。酒も進まぬ、肉も喰らわぬ。となれば貴方が飢えているのは……さしづめ冒険と言ったところですね」

「然り。流石は莫逆の友だ、僕の気持ちをよく分かっている」

隣に腰かけたガウエインと盃を鳴らし、葡萄酒を干す。一人だと酒が進まないのは性分で、話し相手がいるならばそれなりに酔いも楽しめる。

とはいえ今しがた彼に指摘された通り、どうにも宴自体は楽しみきれない自分がいた。

キヤメロツトの大広間には今もたくさんの騎士と貴婦人、楽団や給仕がひしめきあっていて、それぞれ楽しげに時間を過ごしている。だがそれも珍しい光景ではない。となれば酒もそこまで奮わず、音楽にも興が乗らず、貴婦人に話す冒険譚もない自分が居心地悪く感じてしまるのは仕方がないのだろう。

「確かに、友よ、僕は父王の勧めに従ってキヤメロツトに来て良かったと思うよ。特に君と腕を競い合うのはとても楽しい。でも分かるだろう？ 僕は王の側付きになりたくて来たわけじゃあないんだ。僕がキヤメロツトに求めるのは」

「冒険、と。そういうわけですね友よ。それは些か耳に痛い。貴方に気を遣わないわけではないが、確かにこここのところ煌びやかな冒険譚が円卓には溢れていましたね」

うん、と神妙に頷いた。ガウエインは悪くないが、どうにも嫉妬の心を抑えきれないのを見通されている。

騎士と戦士は大きく違う。騎士は騎士道の体現者としてやらなければならぬことが山ほどある。弱きを助け強きを挫き、民を安んじ、王をよく支え、貴婦人に愛と忠誠を誓うのだ。そういう騎士に憧れていたのに、今のところは只管に腕を磨き、戦に出て蛮族と泥臭く

戦うだけ。これではつまらない。

荒廃した大地。飢え渴く民。絶えず襲い来る蛮族。あちらこちらに出没する妖魔や魔獣。このブリテンの大地は正しく混沌カオスの渦の中にある。

そんな中で騎士達の勇敢で美しい物語がどれほど民の心を慰撫することか。となれば憧れる者もたくさんいるし、此の身はそも騎士たるべく生まれたものである。多少の紆余曲折が、生まれる前にあったとしても。

「冒険ばかりが騎士道ではない——と言っても聞いてはくれないでしょうね。円卓には数ある騎士の中で、貴方ほど『騎士らしさ』に拘る者はいない」

「それは褒め言葉ととっていいのかな。それとも最高の騎士の名を、実際に君やランスロット卿から奪い取れない僕の弱さを嘆くべきかな」

「まさか、貴方は真に最高の騎士の一人だとも。しかし確かに、あの慥無礼な湖の騎士ほど自然体とは見えませんね」

「元服前の子どもがやるみたいにな、背伸びしている?」

「さて、言葉にするのは難しい。——そう、貴方はどこか我武者羅なところがある。普通の人とは違う生き方をしているように見えるんですよ」

慧眼だな。心の中で親友に相槌を打つ。

この時代、どんな男の子も当たり前のように騎士に憧れる。その冒険譚に、活躍に。しかし己がこれほどまでに騎士たらんと渴望するのは当たり前を超えた憧れがそこにあるからだった。

(僕にとつては、君の当たり前こそが夢のような宝物なんだ。そう言っただって理解してくれないだろうね、ガウエイン)

いや、誰だって理解してくれるはずがない。

己の、彼らの騎士譚が御伽噺のように伝わっている遼か未来から、我が身の内の魂がやって来たなんて。



なにも、そう難しい話じゃあない。

生まれた時のことは何も覚えていない。正確には、今も全てを思い出したわけじゃあない。

例えば嘗ての自分の魂の持ち主がどんな名前をしていたとか、どんな人生を、どんな最期を遂げたかだとか。そういう情報は殆ど擦り切れてしまっていて分からない。

朝起きて、外が暗かったらどうするか。まあ当然ながら——それなりに裕福ならの話だが——ランプに火を灯す。でも此の手は最初、あるはずもないスイッチを探した。

顔を洗いたければどうするか。ウリエン王の嫡子たる部屋には従者が用意してくれた水の盆があるが、普通は井戸に水を汲みに行くことだろう。でもそれが、最初はとても不便で厄介で、不可思議にしか思えなかった。

万事が万事、こんな調子。あらゆることに違和感があり、それは次第に鮮明になっていった。そしてやがて気がついた。己の魂の由来に。

ゆつくりと色んな知識が頭に浮かび上がってくる。もちろん子どもの頭にそんな難しいことが耐えられるわけがなく、あのときは三日三晩の間、高熱を出して生死を彷徨ったらしい。知恵熱で死にかけるなんて、後世には絶対に伝わって欲しくない騎士譚だ。

前世、と言っているのだろうか。殆どの個人情報パーソナリティがなくて、個性パーソナリティしか残っていない自分の現状がそれに当てはまるのかはよく分からない。

とにかく僕、アーサー王の治めるキャメロットの名誉ある円卓の騎

士一人、ウリエン王の嫡子たるサー・イウエインはどうやら、今から千年以上も未来の何処かに魂の由来を持つ、少し変わった人間らしい。

：：まあ、だからといって。何か変わるわけでもなかった。

王の嫡子というのは忙しくて不便で、自分の境遇を活かせるようなチャンスは中々に得られなかった。少しばかり未来の感性でもつてズルをした部分はあっただろう。父の領土が、本来の歴史に比べれば少しばかり豊かになったかもしれない。

父も母も喜んだ。我が子は聡明だと。お許しください、少しばかりズルをしただけなのです。あと、大して何もしておりません。

真つ当て普通の人間である両親が不気味がるようなことも、政敵に害されることもない程度のズルだと言えば分かりやすいかもしれない。未来の感性、というのは我ながら良い表現だと思う。未来の知識、ではないのだから。

ただ、未来の感性からすれば、この時代は不便以上に輝いていた。だから真つ先に、この時代の花形である騎士に憧れ、ここまで来た。まさか後世にも騎士の鑑、騎士王と名高いアーサー王の宮廷に招かれ、あの円卓に座ることを許されるとは思わなかったが……。

記憶というのは劣化するもので、そもそも個性ぐらいしか明確でない我が身では、ざつくばらんとした知識しか残っていない。残念なことにこの魂の前の持ち主はアーサー王伝説に詳しいというわけではなかったらしい。もしかしたら、イギリス人じゃなかったのかもしれない。

アーサー王というのがブリテンの騎士王というのは分かっていた。ランスロット、ガウエイン、ギアラハッド、あとモードレッドなんて名前の騎士がいて大活躍したという覚えもある。けど、そのあたりが限界だった。

ちよつと物語の最後も思い出せない。そもそも一貫して一つの本になっていったような気もしない。『世界の英雄列伝』みたいなものを読んだんじゃあないだろうか。たぶん最後はめでたしめでたし、で終わるありがちな物語だったんじゃないだろうか。個人的には、是非

ともそうあつてほしいものだ。

しかし最後はめでたしめでたしで終わるかもしれない物語だとしても、今のブリテンは正しく崖っぷちの様相を呈している。易いことなど何もない。困難ばかりで、だからこそ娯楽を、冒険を僕は求めているのかもしれない。

娯楽に溢れた未来の世界ではきつと誰もそんなこと思わないのだろう——冒険の風が僕を呼んでいる。そうとしか思えないのだ。

特にお目にかかりたいのは美しい貴婦人だ。前にガレスちゃんも冒険の旅の話をしてくれたときに「この貴婦人のために戦って死ねたら、それはどんなに素晴らしいことだろう」と言っていた。それを聞いて、どんなに羨ましく感じたことか！

そのあとハアハアし始めてガウエインに頭を冷やすと称した延髄斬りを喰らっていたが、あの瞬間のガレスちゃんは性別を超えて、騎士として輝いていた。そのあとは変態として輝いていた。

変態といえば円卓の一人、嘆きのトリスタン。彼もまた愛を語ることにかけては——ガレスちゃんのアレを愛と呼ぶかはさておいて——右に出るものはいない。竖琴片手に謎の擬音を使いながら、よく愛について謳ってくれたものだ。

僕も良い歳だ、そろそろ妻を娶るのも考えなければいけない。しかし前世の感性ではまだまだ遊び足りない。いや遊ぶつもりはないんだが、その前に先ず曇りなき愛を捧げたいと思うほどの貴婦人に出会いたい。

ガウエインとか、こんな感じで誰彼構わずニコニコとしてるくせに身持ちが固い。で、最近すったもんだの末に美人の嫁さんをゲットした。とてもずるい。僕の見立てではトリスタンもそろそろ年貢の納め時で、彼は速やかに収穫をすることになるだろう。

ランスロット卿も美人と見れば口説きにかかる腰の軽さのわりには浮いた話を聞かないが……？ 最近どうにも彼の調子がおかしいのは親しい騎士なら誰しも気がついてのことだ。漸く本気の相手を見つけたのか、はたまた女難の星が降りてきたか。

——脱線が激しかったが、とにかく僕が言いたいの、挑戦と奇

跡、困難と、あと美しい貴婦人を求めて冒険の旅に出たいということだ。



「——とはいえ、貴方の生き方は隣にいて心地いい。何も心配などしていませんよ、イウエイン」

「そう言ってくれるのは嬉しいよガウエイン。しかし君の隣を長く独占しては奥方に睨まれそうだ」

「やめて下さい。……やめて下さいね、大事なことなので二回言いました。その手の話は私と彼女の間だけで処理しなければ地獄の釜の蓋が開くのです」

「おっと失敬。僕も命は惜しい」

「君もいずれ所帯を持つ素晴らしさと哀しさ、光と闇を存分に味わうに違いないのですから、あまり他人をおちよくらないように」

「了解だ、親愛なる友よ。さて、奥方のことはともかく、それにしても君を独占するわけにはいかないな。どうだい、ここは我が修行に付き合ってくれないか？」

「良いでしょう。丁度ほら、御覧なさい。あれはカログレナント卿では。確か彼は」

「うん、我が従兄弟さ。未だ年若いが、中々に鍛え甲斐がある」

ガウエインが顎を差しむける先を見れば、そこには一人の若者が戯けた様子で会衆に冒険譚を語ろうとしているところだった。

茶色の髪を流行りに逆らって長く伸ばし、編み上げた彼はサー・カログレナント。すぐ下の従兄弟で、共にキャメロットにやって来た勇敢な騎士である。

まあ僕の見たところ勇敢と言うよりは無鉄砲。しかし性根が真っ直ぐで乱暴なところはなく、この未熟者を兄と呼んで慕ってくれてい

た。僕の方も悪い気はしなく、彼の稽古に付き合ったり遠乗りに出かけたりと、最も近い親族だった。

「彼はこの前、短いながらも冒険に出かけたとか。話を聞きに行きましようか」

「そうしよう。まったく、従兄弟に先を越されるとは」

「そう気にはいけない、友よ。もしかしたら彼が、君の冒険のヒントを持っているかもしれませんよ」

冒険には、出たければ出ればいいというものではない。

自らが臨むべき冒険というものがある。それはその時にならないと分からなくて、それが分からないから僕はこうして腐っていたというわけなのだ。

盃に葡萄酒を注ぎ満たし、卓を立つ。他人の冒険の話が僕の役に立つとは到底思えないけれど、いつか冒険に出る時の一助にはなるかもしれない。

手ずから作った、茹でた野菜の山を持って新たな生贄の下へと向かい始めたガウエインの後について僕が思うのは、とにかく自分が主役を張れる冒険の舞台。

いつか僕を主題に吟遊詩人達が謳う、そんな冒険のことばかりなのであった。

第1話 オレ、あるいは仇討ちの旅路

「ぜりやあああつ!!!」

この戦いで一番大きく踏み込んで、振りかぶった剣を勢いよく下ろす。脳天目掛けてから竹割りに。思った通りとはいかなかったが、刃は兜の半ば程まで減り込んで敵を停止せしめた。

いい感じだ。前よりずっと良い。威力もそうだが、慣れてきた。思い切りよく踏み込んで良い時に踏み込んで、振りかぶるべき時には振りかぶる。そういう勘働きが効いてきている。

「いい感じだな」

口に出して、もう一度。自惚れではない高揚感に唇の端つこが歪んだ。ただ、それもすぐに消える。こんなのは大したことじゃない。自分が目指す高みはもつと遙か先にあるはずだ。

力なく崩れ落ちた鎧兜は、そんなに怖い敵じゃあない。元々只の練習相手。それも高度な駆け引きとか、熟練の技量とかを持っている相手でもない。素人に毛が生えた程度の敵。ただ剣と盾を振り回す案山子のようなやつだ。

もちろん只の案山子を斬りつけてるよりは断然いい。特に剣撃の威力、間合いの測り方、体捌きの練習相手にはもってこいだ。

ただ、逆を言えば、そればかりしか練習できていないということでもある。分かっている。自分には圧倒的に実戦経験が足りていないということぐらいは。

「……今日はこれで終わりか？」

「はい、お嬢様。お疲れ様でございました。どうぞ」

「ああ。……ちよつと酸っぱくないか、コレ？」

「お疲れの時はそのぐらいが丁度いいんですよ。さあお着替えになつて下さいませ。お食事の支度も済んでございますよ」

世話役の侍女、リユネットから渡された飲み物——果汁を水で割つたものだ——を飲み、促されて広場から離れる。

母上と似た、雪のように白い髪の彼女はオレよりはそこそこの年上で、もう何処ぞに嫁いで子どもがいると言われても不思議ではないぐらいには、まあ家の周りのことは何でもよく気がつく女性だった。

お仕着せもそこらの女中なんぞとは違つ上等なもの。母上が彼女を相当に重用している証だろうか。この城で初めて会つた、そして唯一共に暮らす彼女が以前に何をしていたのかは聞いたこともなかった。少なくとも時間二人きりで過ごし、寄せた信頼は深い。

稽古の相手を務めてくれた泥人形が、鎧兜だけ残して崩れ去る。これもリユネットが用意してくれたものだ。彼女は直接の主人である母上から力を借りて、オレではさっぱり分からない高度な魔術を使うことができるのである。

オレの母上——モルガンは『黒い矩人』と呼ばれる古い種属の血を引いていて、できないことを探すほうが難しい。他人に異能を授けるなんて朝飯前だろう。

最後に会つたのはいつだったか。少なくともこの城に放り込まれてからは一度も会つたことがない。

「なあリユネット」

「はい、お嬢様」

「母上はいつ頃、オレを騎士にしてくれるんだ？ もう城で剣を振り回して結構経つぜ。オレがまだ未熟者なのは分かるが、正直飽きた」
「お嬢様も堪え性が身につかれませんか。さて、かねてより申し上げておりますが、私には奥様のお考えなど見当もつきませぬ」

「……だよなあ」

リユネットの用意してくれた、パンとスープの質素な、それでいて

不思議と力が溢れる食事を摂りながら口を開いた。

お食事の最中にお喋りなんてはしたのうございますよ、と注意されるも知らん顔。どうにもオレは我慢つてもんが苦手で、特にどんなにリユネットに言われても、お上品なお作法は全く身につかなかった。

「……ですが」

「ん？」

「お嬢様も一通り、武芸の基礎は身につかれたかと存じます。私の見る限りではございますが、有象無象の騎士に遅れをとることはないでしょう」

世話と労いの言葉ばかりのリユネットからの、初めての褒め言葉。思わず、少し上ずった声が出る。

がたり、と机を揺らしてまた怒られた。ぐい、と持ち上がった気持ちも少々の落ち着きを取り戻す。

「奥様から頂いた傀儡の技では、最早お嬢様のお相手には不十分やもしれませんね」

「じゃあ」

「じゃあ？」

「あいつを……エスカルドスを倒せばどうだ？ 母上もオレを認めてくれるかな？」

エスカルドス、とは人の名前ではない。リユネットが魔術で作り出すものとは別の傀儡。この城の護りを任された、母上自ら造られたゴーレムだ。

この城の入り口は湖に面していて、リユネットみたいに特別な方法で出入りするのだから恐ろしい罠を潜り抜けなければ侵入することはできない。そして万が一その罠を超えたとしても、この最強のゴーレム——母上曰く『エスカルドス・ザ・グレート・スカーレット・タイフーン・エクセレントガンマ』。オレがスカタン卿と呼んだらワ

リと容赦なくシバかれた——が立ち塞がる。

2メートルを優に超える巨躯。分厚い鎧と鏡のように磨かれた剣。そして前に立つだけで感じる、身の毛のよだつ威圧感と溢れ出る魔獣の力。

コイツを超えることができれば、オレはこの城で守られる存在ではなくなる。所謂一人前になれるんじゃないかと、オレは少し前から考えるようになっていた。

「エスカルドス・ザ・グレート・スカーレット・タイフーン・エクセレント・ガンマですね。確かにあの泉の守護者たる彼を倒す力量があれば、騎士としては申し分ないでしょう。しかしお嬢様、奥様が待ってらっしゃるのは、貴女がエスカルドス・ザ・グレート・スカーレット・タイフーン・エクセレント・ガンマを倒すことではないと私は思います」

「(長エな)……どうということだ?」

「奥様が貴女をお育てになつている理由こそが、その答えかと。傀儡では代わりにならぬ、大きな役目を奥様は貴女に期待されているのですよ。直接お育てするのは、適わないながらも」

実の母モルガンからは得られなかった、母親のような優しい微笑みを浮かべてリユネットは言った。

オレを生んだのはモルガンだが、オレを育てたのはリユネットだ。だからリユネットの言うことは何でも信用できる。リユネットがそう言うなら、きつとそうなんだろう。

「大きな役目、ねえ」

今も覚えている。常人とは成長の速さが違うこのオレが、それでもまだ小さかった頃に見たあの姿を。完全無欠の、あの美しい王の姿を。

母上は言った。いずれオレが彼の王を倒してブリテンの王座に就

くのだと。それがオレの役目であると。誰にも汚すことの適わぬ、あの王をオレが倒すのだと。

そんなのは無理だ。あの王は美し過ぎる。誰もが彼に憧れずにはいられない、そんな魅力と強さ、正しきを持った完全無欠の王性の具現。だからオレは、こうして母上に従って己を鍛えながらも、きつと自分は母上の思う通りにはならないだろうなという漠然とした確信があった。

「じゃあ結局しばらくはこうして、泥人形相手にチャンバラごっこ、か」

「それはいかがでしょうか。お嬢様の剣の腕も一つ、上の段階に進まれた以上は何か新しいことが——ッ?!」

「……なんだよ?」

突然、リユネットが金縛りにでも遭ったかのように硬直した。目を見開き、眉を寄せて。

今までなかった、真剣な顔と態度。何かあった。それは間違いない。けど泉と森に守られたこの城にどんなことが起こるっていうんだろう。

「……エスカルドス・ザ・グレート」

「あー、長エ」

「……エスカルドス卿が何者と交戦状態に入っています。この前、泉に度胸試しに来た騎士とは別の者です」

「はあ? いやいよこの城も噂話の種になったか……。まあ、つつても、この前の騎士もすぐに追い払えたじゃんか。そりゃ、あの泉の仕掛けが見つかること自体珍しいとは思うけど、すぐに終わる問題だろ」

城へと入る道は、泉に守られている。泉は特別な仕掛けを解かなければ入ることはできず、その仕掛け自体が試練となっているので、生

半可な奴ではその試練に突破することはできない。

そして泉の試練を突破しても、そこにはスカタン——もといエスカルドスがいる。オレでも未だ勝てるか分からない、母上謹製のゴーレムを突破した者は未だいない。今話した通り、ちよつと前に若い騎士が冒険にやって来たが……エスカルドスにあつさりと蹴散らされて逃げていったぐらいだ。

「いえ、どうやらそうはいかないようですよ、お嬢様」

「あん？」

「エスカルドスが敗れそうです。この騎士、先の若者とは段違いの腕前です」

「……嘘だろ、母上のゴーレムだぞ。ブリテンで一番の魔女が造ったゴーレムが、そんじよそこらの騎士に」

思わず、声が震える。

あのゴーレムは普通の人間が挑む相手ではない。普通の騎士が、己の名誉を賭けて、冒険を求めて腕を試す相手ではない。殆ど災害のような、竜退治をするような度胸や覚悟で以って挑む相手だ。

現にこの前の騎士は散々に打ちのめされて逃げて行った。オレもリユネットの魔術で覗き見てたが、そんなに悪い腕じゃなかった。オレと戦り合ってたっていい勝負をするだろう。もしかしたら、その時の運によっては負けるかもしれない。

そのゴーレムが負けそうだとリユネットは言った。いったい何の冗談だ。

それは、エスカルドスが負けたら、その騎士がこの城に侵入して乱暴狼藉を働くかもしれないという恐れではなかった。絶対強者が負けることによる、己の常識の崩壊への怖れでもなかった。

それはこの変わり映えのしない日常に吹き込んだ一筋の風。リユネットが言っていた、オレの「これから」をガラリと変えてしまうだろうナニかの予感。

オレの顔に浮かんでいたのは、決して恐怖じゃあない。

多分、そう、それはまるで獅子のように。
楽しげに、嬉しげに、そして挑戦的に。
オレは笑っていたに、違いないのだ。



馬を走らせること、7日は経つただろうか。手持ちの食料は尽きて、途中の小さな城で親切な老城主から授けられた弁当だけが頼りだった。

我が従兄弟、サー・カログレナントの冒険の話をキヤメロットで聞いた僕は居ても立つても居られず、すぐさま冒険の風にこの身を委ねて城を発っていた。従兄弟の話とはいえ、それはまるで荒唐無稽。本当にあったことなのか、作り話なのかすら分からないものだったというのに。

これがきつと、冒険に出るということなのだ。口に出して誰かに教えられるような理由、根拠もなく、ただこれこそが己に課せられた冒険なのだというがむしろ確信だけが頼りの出発。ガウエインも、ランスロット卿も、ガレスちゃんもきつとそうだったのだろう。

とにかく静かに、うっかり誰かに付いてこられないように。とにかく早く、誰にも知られないように。僕は馬を走らせる。この冒険を誰にも渡すつもりはなかった。カログレナントには悪いが、彼の失敗とこののは、おそらくは僕をこの冒険に導くためのものだったに違いない。

『従兄上、誓って此れは本当のことにござる。某、口が回らぬ故に御婦人との縁には恵まれないとケイ卿などには言われまするが、こればかりは真実にござる。そして信じて欲しいことがもう一つ。某が決して意気地なしなどではないということにござる』

かばら、かばらとゆったりとした並足で駆ける愛馬の背で、僕はあの日のカログレナントの必死な様子を思い出していた。

あの生真面目で一生懸命な従兄弟が話した、面白おかしい冒険の話

を。
『最近とんとカメラロットにはご無沙汰にござったが、某、ひと月ほど前にプロセリアンドなる森まで冒険に出かけてござる。まるで魔法のごとき目に遭い、何とか某の五体と此の冒険話のみ持ち帰ることができたという始末。しかし某が特別臆病で弱虫というわけにはござらぬ。とにかくこの摩訶不思議な話を皆様にもお聞かせしたくござる』

本人の語る通り、カログレナントは決して臆病な男ではない。特別武勇に優れたというわけではないが、円卓に名を連ねる騎士として恥ずかしくない腕前を持っている。

ただ何というか、どうにも自分の力量では対処しきれない冒険ばかりが彼の下に降ってくるという羨ましい運命に恵まれているらしい。そしてその失敗談を、少しも恥ずかしがることなく、臆面もなく面白おかしく語ることができるといふ宴会向きの性格をしていた。

『運命の風に吹かれるままに森の近くに向かっていた某でござるが、その近くの城にて親切な領主と美しい御令嬢の元で一夜の宿を頂戴し、その夕餉の席にて拙者にうってつけの試練の噂を得たのでござる』

この従兄弟殿にうってつけの試練というのは、当然ながら彼が勇敢に挑んだ挙句に這々の体で逃げ帰るまでの一連の流れを言うに違いない、と僕はガウエインと笑いあった。

もちろん古風な喋り方のカログレナントがその失敗を気にするということもない。そんな彼の周りに老若男女を問わず、彼の冒険譚を聞こうと人々が集まってくるのは当然の流れなのだろう。

『彼らの話に従って、巨人が荒くれ野牛を御す危険な牧場を越え、某は不可思議な泉へと辿り着いたのでござる』

氷のように冷たく、熱湯のように沸騰した魔法の泉が、森の真ん中に佇んでいた。カログレナントはその時の興奮は人生で一番だと語り、そして泉の美しさもまた人生で一番だったと謳った。

そして先の牧場の主人である巨人の言葉に従って泉の試練を破ったカログレナントは、彼の運命がまあいつも通りに示す通りに、新たな試練に出逢ったのだ。

「……ここが、カログレナントの話していた泉か」

成る程、それはこの世のものとは思えない美しい泉であった。

大きさは大したことはないだろう。キャメロットの中庭ほどだろうか。ぼこぼここと恐ろしげに泡を立てて沸騰しているのに、馬から降りて近づけばその湯気は氷のように冷たかった。

底が見えるほどに透き通っているのに、動物は誰も近づかない。泉の先には馬一匹が通れるぐらいの小さな道が続いていて、なるほど、この道を守るための魔法の泉なのだなど一人で合点した。

この泉、こんなに美しい水を湛えているのに動物どころか小鳥一匹近寄る様子がない。並人ではこの泉を超えることはできないのだろう。指一本でも浸ければタダでは済むまい。

現代人の感性からすれば何とも不思議なことだが、僕の過ごすこの時代の人々というのは、こうした閃きじみた理由も定かでない確信を得る能力を持っていた。これを無視して、良いことがあったという話はずいぞ聞いたことがない。

『その泉は何をしても渡ることはできないと。ですが一つだけ。この泉の側のエメラルドの岩に泉の水をかけることによって、その先への道が拓けると聞いてござる』

泉は様々な岩や石で囲われていた。それは宝石、鉱石、とにかく多種多様で統一感というものがない。しかし雑多な中にある美しさは失われていなかった。

その中でも一際美しいのがエメラルドの巨岩であった。近くには金の鎖で吊るされた手桶のようなものがあつて、おそらくはこれを使えばいいのだろう。

この得体の知らない泉、できれば一滴も水を浴びたくないものだ。僕は鎖を使つて何とか器用に桶に水を汲み、素早くその中身をエメラルドの巨岩に撒いた。

『某も具体的なやり方というのは城主殿ではなく、牧場の巨人から聞いてござるが……いやはや、あれほどの試練とは思わなんだ』

カログレナントは多くは語らなかつた。この試練については、語るよりも自ら挑んで体験した方がいいと思つたのだろう。

エメラルドの岩に水がかかった次の瞬間、まるで天地が一変したように凄まじい風が吹き、湖の水は竜巻のように荒れ狂い、僕は立っているのも難しく必死で地面に五体でしがみついた。

轟々と吹き荒ぶ風に息を吹き込まれたように木々は身体を振り、鞭もかくやと手当たり次第に地面を打ち付ける。この惨状を引き起こした僕を叩き潰そうと、めくらめっぼうに。

馬を離れたところに繋いできて本当に良かった。近くの木々に繋いでいたら、今頃真つ二つに引き裂かれてしまつていたことだろう。

一番最近に叩かれた地面のそのクレーターを這うようにして移動しながら、僕は何とか木の鞭を躲す。鎧兜なんて役に立つはずがない。腰に佩いた祖父の形見はともかく、槍なんてとつくに手放していた。

「……わあ、神様」

——どれだけの時間が経ったのか。いつの間にか風は止み、木々はその怒りを収め、鳥の声も聞こえぬ静寂が訪れた。

その時の気持ちは何とも言えないものだった。凝縮された自然の脅威、怒りを無様ながらも何とか克服した喜び、拭いきれずに残る恐怖、そんな身の程知らずな挑戦を適当な気持ちでしてしまつた後悔、それらがごちゃ混ぜになつたものだった。

カログレナントはこの体験を、死ぬかと思つたと端的に表現していたが……成る程、その時はなんて大袈裟な、と皆が馬鹿にしたが、これは確かに恐ろしい体験だった。

『無論、これで試練は終わりというわけではござらぬ。謂わば此れは挑戦者が真の勇者たるやを問うもの。そして次は——』

全てが終わつた泉は、その様相を一変させていた。

鬱蒼と茂つていた草木は頭を垂れたかのように、弱り果てたように疎らに見え、泉の水は全てが竜巻と共に消え去つて、枯れ果てている。そして泉の先の小道へと渡れるようになっていたのだ。

度胸のない者、あの悪魔が荒れ狂つたかのような風雨に耐えられなかつた者では泉を渡る資格を問われる権利すら与えられない。胆と勇を試されて、次は順当に行けば武を試される。

「……問おう、そこもとは何者か」

長く深く息を吐き、心を落ち着けてから口を開いて尋ねる。

そこには一人の立派な騎士が立っていた。

素肌の一切、目元すらも見せない赤錆びた全身甲冑に身を包み、恐ろしく重厚な盾と素晴らしい拵えの剣を持つている。そして見上げるような巨軀。円卓の、いや今まで会つたどんな騎士よりも大きい。

でも一番に感じたのは、圧倒的な戦^{オーラ}気だ。台風に押されているかのような、全身の関節を針で突き刺されるような、足の裏が地面から浮いてしまふような威圧感だ。

アーサー王やランスロット卿、ガウエイン達と本当の本当に敵として戦場で会えば、こんな風を感じるのだろうか。それとも竜退治にも行けば、魔獣や魔法使いを仕置きに行けばこんな風を感じるのだろうか。

恐ろしい。生まれて初めて、この身を翻して逃げてしまいたいという衝動に駆られる。

嬉しい。生まれて初めて、この身を真つ二つにされたって戦いたいという衝動に駆られる。

「我こそはウリエン王の嫡子にして、円卓の名高きアーサー王の騎士、イウエイン也。過日、我が従兄弟、サー・カログレナントが此の地にて着せられた汚名を雪ぎに参った。そこもとはカログレナントを打ち負かした騎士也や？」

お世辞にも武芸が達者とは言えない従兄弟は、真実勇者であった。憚りながらもガウエインと競り合える腕を持つ此の僕が、ここまで震える。そんな相手に勇敢に挑んでいったのだから。

……深くお辞儀をしてから堂々と問うたが、こちらを見ているのかすら分からぬ赤錆の騎士は何も返してくれない。立ったまま寝てるのか？ いや、そんなことはあるまい。となると馬鹿にされているのか。相手にもならぬと、侮っているのか。まさか、このイウエインを。

「返す言葉なし、か。とはいえカログレナントを一敗泥に塗れさせたのは卿に違いあるまい。そも豪傑たらんとする者がこうして出逢い、交わす言葉がない。なれば、刃を交えて腕を試すのが騎士の慣い。卿が案山子にあらず、その武具が虚仮威しでないならば。このイウエインの挑戦を受けるがいい！」

カアツと頭に血がのぼる。僕は昔から他人に侮られるのが大嫌いで、人一倍プライドが高いだけに色んな騒動を巻き起こす。特に、無視されるのは殊の外に腹が立つものだ。

ギシリ、と赤錆の騎士の鎧が軋む。兜の目庇の奥に、赤い光が灯ったような錯覚。地を指し示していた鋒が、ゆつくりと上がった。

『某、その騎士にこてんぱんに打ちのめされてござる。ほうほうのていで逃げ帰って、何とか命だけは取り止めた始末。本当はこうして喋るのは気の進まぬものでござったが……ケイ卿、王妃様に請われてはお聞かせするより他はなし。従兄上、あにうえここだけの話、某は悔しゅうござる。某は彼の赤錆の騎士に、まるで見向きもされなんだ。ものついでに吹き飛ばされ……。嗚呼、せめてこの身を捨てても一太刀入れられていれば』

なんでもないように語ったカログレナントは、不器用にも笑いながら悔しげに口元を歪ませていた。

ならばこの冒険は仇討ちでもある。確かにカログレナントは赤錆の騎士の相手にもならなかった。それは彼の未熟ゆえのことで、彼の責任である。

しかし僕がこうして、彼を慰めるためにも戦う理由には十分にすぎる。現代人の感性ではどうでもいい、しかし僕を確かに形作っている存在するこの時代の精神性は、迷わず挑戦を選んだ。

祖父の形見の漆黒の剣を抜き放ち、大上段に構えた。この鋭い一振りにて、先ずは目にも見せてくれる。

「この挑戦、受けてくれるものと見た。いざ尋常に勝負！」

赤錆の騎士がゆつくりと盾と剣を構え、圧を放つ。それに応えて僕は盾を投げ出し、両手で剣を構え、気合一声駆け出していった。

親切な城主と美しい御令嬢には会えた。荒々しい野牛たちの牧場と、恐ろしい巨人の牧場主にも会った。ならば冒険の締めくくりには勇敢な騎士への挑戦こそが相応しい。

あれほど憧れた冒険と挑戦を前に鋒が熱を持ったかのようだ。

このシンプルな時代にシンプルな喜びに満ちて、僕は大上段に構え

た剣を全力で振り下ろした。

第2話 妾、あるいは赤錆の騎士

「……遂に」

思わず、といった風に言葉が溢れる。

目の前には大きな水晶玉が置いてあった。手を翳せば曇りのような陽炎の中に、望んだ光景を見通すことができる。遠見の魔術は魔女の基本。長ずれば過去や未来を覗くことも思いの儘。

その陽炎の中では、二人の騎士が激しく斬り結んでいた。赤錆びた輝きを放つ全身鎧フルアーマーに身を包んだ巨軀の騎士と、特に特徴も変哲も無い白い鎧に身を包んだ若々しい騎士。

赤錆の騎士はエスカルドス・ザ・グレート・スカーレット・タイフーン・えくせり——エクセレント・ガンマ。妾わらわの作り出した傀儡。娘を守り、挑戦者に試練を与える守護者。

そして白い鎧の騎士は、嗚呼、ブリテンに名高き騎士王アーサーの麾下、円卓のイウエイン卿と名乗った。あのアーサーイも王の！ 騎士王アルトリアの騎士だと！

「ローデイナーヌ、我が娘。貴女も漸く、籠から飛び立つ時が来たようです。すね……？」

妾が創り出した傀儡と丁々発止と斬り結ぶ様は、成る程、彼の太陽のガウエイン卿とも渡り合える腕前を持つという評判は正しかったらしい。相手の剣を弾いては踏み込み、身を削られては削り返す荒々しい若武者だ。

互いに無数の傷を負い、それでも一步も退くことをしない。先日も円卓の騎士を名乗る若者がエスカルドス卿に挑戦しに来たが、まるで歯が立たずに逃げていった。威勢だけは褒めてやるが、あれではない。到底足りない。

妾が求めているのはどこまでも苛烈で、清々しい個性なのだ。人ではない我が娘に強烈に人間らしさを感じさせるには、先ずそういう心身の強さが必要なのだ。

「今までよく、我慢してくれましたね。でもそれもおしまい。これからは私からではなく、外の世界から学び、成長するのです。そして――」

アルトリア
王座を、我が手に。

思わず掌に力が入り、ミシリと水晶が悲鳴をあげる。慌てて修復の呪文を唱えたが、少し歪んでしまったかもしれない。大きな水晶は貴重なのだ。コレは特に綺麗な曇り方で気に入っていたのに。

昔から同じだ。些細なことから、重大なことまで。妾が愛したものは妾から離れていく。物も、人も。あの胡散臭い花の魔術師は『うん、おそらく君の起源はね、照れ隠しに主人公に暴力を振るって、転校生に漁夫の利を攫われる幼馴染系ヒロイン』なんて戯けたことを抜かしていたが……別に妾は暴力なんて振るったことはない。

だからローデイナーヌ。貴女は先ず妾から手放した。貴女は母の愛を知らず、侍女に育てられ、そも人として生まれなかった可哀想な子。でもそうでなければいけないのです。

貴女はブリテンの王になるべくして私が産んだ。今の王ではブリテンに栄光と共に必ず破滅を呼び込んでしまうから。あの王は人としての政まつりごとをしない。理想だけでは人は長く幸福を掴むことができないと、あの王いもうとは気がついていないのです。

後世に永く伝えられるだろうアーサー王の騎士譚。それは絵画のように美しく、聖書のように綺麗なのだろう。でもそれは創作ならばこそ。人ならぬ神の身ならばこそ可能なこと。人の王である「あの子」には、そんな騎士譚など要らない。

何故そんなものを選んでしまったのだろうか。何が不満だったのだろうか。意地悪ながらも優しい兄では、不器用な姉では不満だったのだろうか。

妾は憎い。妾は憎い。妾は憎い。

ローディーヌ。ローディーヌ。貴女はああなつてはいけない。あんな様さまになつてはいけない。そのために彼を此処へ喚んだのだ。

妾は知っている。貴女は一目見ただけのあの王に心底から憧れを抱いていることを。無垢な貴女の生まれと育ちがそうさせてしまうのは道理。ならばこそ、そうであつてはいけないと教えなければ。

人が人の上に立つ。それが王国。それが王。神が人の上に立つ時代は確かに終わりを告げたのだ。妾達のような存在もやがて陽炎の中に消え去り、幻想もまた露と消える。だから世界の裏側へと静かに消えていかなければならない妾達は、世界との関わり方を間違えてはいけない。

：：ああ、だというのに、あの妹は。花の魔術師に唆されて、破滅へと進もうとしているのだ。

「妾は貴女にもまた、つらい運命を強いているのかもしれない。しかしローディーヌ、貴女ならきつと大丈夫。神から人の世を取り戻すのことが、きつとできる。そしてどうか」

貴女の父親を。私の妹を。

この水晶の陽炎に垣間見た残酷な運命から解き放つてほしい。

己の残酷さこそ、もつとも忌むべきものであると。そう理解しながら、しかし妾はそう望むよりほか、なかつたのです。



「——か、はあ」

額から、頬を伝つて止めどなく流れる汗。その雫が、残骸のようになつてしまった喉ゴルゲットに落ちる。既に兜は正真正銘の残骸だ。戦場の

端つこへと転がり、真つ二つである。

震える両腕で何とか愛剣『ケンヴェルヒエン』を構え、僕は赤錆の騎士と相対していた。腕だけではない。脚も、腹も、背筋も、何処もかしこも限界を訴えて震えている。もちろん怯えではない。怯えて震えるぐらいなら、喜びで震えていることだろう。

しかし剣は掴めるし、真つ直ぐ立てる。呼吸も今、次第に落ち着いてきた。よしんば乱れたままでも問題はなく、こんな有様でも戦うための力は十分に残っている。

ああ、この激闘を始めてからどれぐらい経っただろうか。あまりの集中力に時間の感覚は殆どない。でも並の騎士が相手なら数時間はぶっ続けで戦っていられる僕がここまで疲弊している。此奴はガウエインに匹敵する強者だ。となると今の僕の感じでは、少なくとも小一時間は戦ったとみえる。

「……だつてのに、ちつとも堪えた様子がない、とはね」

対峙する赤錆の騎士も決して無傷ではない。盾はひび割れ、刃は毀ち、数えきれない剣戟の痕を鎧のあちらこちらに刻んでいる。

しかし、ちつとも堪えちやいない。その力、速度、ペースが落ちない。まるで疲れ知らずだ。四肢の欠損でもなければ、此奴の動きが精彩を欠くことはないだろうと思わせるほどに。

(そこまで実力差がある、ということか。いや、そんなバカなことがあるか。太陽の加護の下のガウエインのような超常の守護は感じない。なら僕と打ち合つて全き無傷なんてキャメロットの常識外だ)

自惚れではない。僕を認めてくれた無二の親友への信頼が故に言うが、僕は決して弱くない。あの太陽の騎士が僕を好敵手と認めてくれているんだから。僕が逆立ちしたつて勝てない相手は、即ち円卓の総力を以てしないと勝てない相手でもある。

ならば必ず、其処には絡繰がある。仕掛けがある。真つ向から四つ

に組んでも意味のない相手だということである。真つ当な人間を相手にしているとは思わない方がいいということである。

(だいたい疲れ知らずの人間とか、痛み知らずの人間には裏で糸を繰ってる黒幕とか、何か鍵があるはずだ)

この手合いとは初めての戦いではあるが、決して無敵ではない。冒険へと逸る気持ちを抑えながら他人の冒険譚を聴き続けた僕なら分かる。

普通に斬りつけてたのではキリがない。それははっきりと分かる。例えば全身のどこかにある、魔法の操り糸を断つならば、どうすればいいか。

『この手合いの操り人形というのは実に厄介でござる。自分の意思を持つならば全身をバラバラにすればよろしゅうござる。どうして動かせませんからな。魔力の糸で操るものならば、これまた全身をバラバラにすればよろしゅうござる。何処かを絶つても、別のところに糸を付け替えられてしまいますからな』

実力はさておき、冒険譚だけは円卓の誰よりも豊富な従兄弟の言葉を思い出す。難しいが、できないことではない。何より僕の愛剣には強い神秘が宿っている。

魔法で動くものが相手なら、より強い神秘の力で斬り刻んでしまえばいい。こういう武器は騎士同士の一騎打ちに使うようなものじゃないが、相手に確実に絡繰があるなら話は別だ。

「その正体、暴かせて貰うぞ！」

宝具。

やがては英霊と呼ばれる英雄達がいる。アルスターの光の御子。竜殺しの大英雄。神話に生きた数多の英雄達。彼らの象徴、武器こそ

が宝具と呼ばれる、つまるところ必殺技。

僕の周りにも、魔法の武器を持った人はたくさんいる。トリスタン卿の弦弓フェイルノート、ガウエインの太陽の剣ガラティーン、ランロット卿の無毀のアロンダイト、そしてアーサー王の聖剣エクスカリバー。

そして祖父キンヴァルフより譲り受けた僕の剣もまた、かつての英雄達の武器や我らか王の聖剣のような魔法の武器。

赤錆の騎士が如何なる道理で動いているかは知らないが、この一撃で断ち切ってみせる。

「――斬り裂け、『黒く貴き鴉の濡れ刃』！」

大きく振り下ろした刃から、同じ勢いで飛び出す無数の鴉。

僕が祖父から貰ったのは一本の魔剣じゃあない。祖父が自慢にしていたのは『空裂く七十と二十七と三の魔剣』。それを一本に束ねたのが僕の魔剣『黒く耀く烈空剣』なのだ。

そして巷で僕が祖父から受け継いだと言われているのは、この三百本の魔剣のコレクションの他に、三百羽の鴉の使い魔。一羽一羽が戦士一人に匹敵する妖鴉は触れるもの全てを斬り裂く魔剣の化身でもある。

即ち僕の魔剣は、三百本の魔剣のコレクションと三百羽の魔鴉の使い魔を合体させたものなのだ。故にこの鴉達は魔剣と同じうして、僕の剣戟と合わせて喚び出すことで剣戟となり、敵を刻む。

「――ッ!」

果たして、ケンヴェルヒエンは兜を真つ向から唐竹割りに。そして妖鴉の刃は四肢を断ち、赤錆の騎士は堪らず五体を地に投じた。

いや、浅い。微妙に関節部を刃が逸れたか。まだ動ける、が、戦えるほどでもない。

頭の割れた兜の隙間からは、黒い霧のようなものしか見えない。

思った通り、此奴は真つ当な騎士じゃあなかつた。騙された、揶揄われた、と知った途端に頭に血がのぼる。およそ騎士の誇りをかけた戦いに、こんな無粋な魔法なんて酷いケチをつけやがってと。

「おのれ、逃すか貴様！」

もう人の形を保つ必要すらないのか、赤錆の鎧を捨て、騎士は泉の向こうへと形容しがたい四つん這いで逃げ出していく。

黒い霧の中には獣の骨や牙、宝石、植物の蔦などが見える。あれを覆うように黒い霧を纏わせて動かしていたのか。およそ真つ当な、僕の見たことのある魔法じゃない。あの花の魔術師が使うような、分かりやすい魔術じゃない。まだ魔術が僕たちの頭に分かりやすい形に纏められる前の古い術の使い手ということか。

「……ええい、だったら何だって言うんだ。相手が人じゃないなら、わざわざ騎士の慣いに従って慈悲を与える必要もない。カログレナントの名誉を回復し、あの兜の一つでも戦利品に持ち帰って、そうしてケイ卿の鼻を明かしてやろうじゃないか」

ケイ卿は王の兄上、そしてキャメロットの宰相でもある。しかし何と云うか実に性格の悪い方で、カログレナントのことこそ笑わなかったものの、では敵討ちに参ろうと言った僕を散々慇懃無礼に煽ってきたのだった。

僕はこの通りカツとなりやすい性格で、口喧嘩ではとてもじゃないけどケイ卿には勝てない。となると論より証拠と、戦利品を手に凱旋するしかないのである。

「ぐ、意外に早いぞ彼奴」

鎧兜を捨てた分だけ、軽くなつたのか。手負いとは思えないほどに影の獣の動きは俊敏だった。

対してこちらは正真正銘の手負い。馬もなく、傷ついた身体を庇いながら、走ることもできずゆつくりと追う。

泉を抜けた先の小道はだんだんと狭く、しかし手入れの行き届いたものになっていった。あの泉は正に門のようなものだったのだろう。僕が初めて、その試練に打ち勝ったものなのだろうか？ 果たしてアレの主人はどんな人なんだろうか？

「…あれは、城？　なんて綺麗な、キヤメロットとは毛色が違う美しさだ。おかしいな、悪いものを感じないぞ」

赤錆の騎士の中身の、黒い影。あれは古い技で造られたものだろうが、明らかに邪悪の匂いがした。僕らが許容できるような魔法では到底ない、魔女か悪魔の技だった。

でも目の前に見えてきた城は、とても綺麗で、清らかで、和やかな雰囲気を放っていた。亡国のお姫様が静かに、穏やかに暮らしているうな、邸やしきという言葉の方が似合いそうな、そんな小さな城だった。

あの邪悪な影は一直線に其処を目指す。逃げる、というよりは襲いかかるかのように。何かゾツとするものを感じて、僕は痛む身体に鞭打って駆け出した。

（順当に考えれば、あの影の主人が住む城なんだろう。けど、城には住む者の性根が写る。僕にはどうにも、あの影とあの城のイメージが合致しない！）

僕の父であるウリエン王の城は、祖父の厳格な姿勢を反映した無骨で重厚なもの。キヤメロットは其処に集う騎士達のように絢爛豪華な理想の城。噂に聞いた悪竜ヴォーティガンの卑王の城は鬱蒼とした森と暗雲に囲まれた山城だったらしい。

ならばあの和やかで穏やかな城の主人はどんな人だろうか？　そこまで考えたところで、僕は思いもよらぬものを見つけてしまった。

「……ッ、いけない、お嬢さん其処を離れるんだ！」

城の前に立つ、一人の少女。

白いドレスは普段着だろうか。眩い金髪はやや短めに切りそろえられ、風に靡いている。

とても華奢だ。この城の主人の御令嬢だろうか。それとも何処ぞのお姫様だろうか。事態を把握していないのか、ぼんやりと立ち尽くしている様子で、僕は思わず声を上げた。

黒い影は一直線に彼女に突っ込んでいく。速度を緩めることなく、まるで彼女に襲いかかるように。

御令嬢にどうこうできる速度ではない。避けるどころか反応できるかも怪しい。声はあげたが届いていないか、間に合わないか、すぐに影は彼女に触れる。

何とか脚に最大の力を込めて踏み込む。到底足りない。距離も時間も、速さも足りない。魔法も使えず、剣を振りかぶる暇もなく、すぐに彼女に黒い影は達して――

「……へ?」

銀光一閃。

気がつけば深窓の御令嬢が振り払った刃と、真つ二つになって散っていく影。

何が起こったのかさっぱり分からず、呆けた頭は脚の制御を手放した。

「う、うわああっ?!」

自然、足は纏れ、体は宙に投げ出される。

何回か地面をバウンドし、仰向けに背中を強打。肺の中の空気をいっぱい吐き出し、僕は呻いた。

あちらこちら、体の節々が痛い。心身双方へのあまりの衝撃に、全

く力が入らず、そのまま空を見上げる。頭を打たなかったのは本当に幸いだ。

「……よう、大丈夫か？」

木々の葉に反射して美しい日光と、青空。白い雲。その視界にひよっこりと彼女の顔が現れる。

遠目に見て、想像した通り。砂金のような髪の毛、湖の底のような瞳。でもどちらにも、燃え上がる炎のような力が宿っている。

ああ、深窓の御令嬢だなんてとんでもない。

僕の剣に匹敵する得物を軽々と肩に担ぎ、彼女は僕に手を差し伸べた。

「オレはローディーヌだ。アンタは？」

「……僕はイウエイン。ウリエン王の息子で、アーサー王の円卓の騎士だ」

その手をつかみ、グツと力を込めて立ち上がる。

やはり小柄で、華奢。でも大の男を軽々と引き上げて微動だにしない。

勝気な口元がニヤリと歪み、そのまま握手を交わした。やはり握った掌はとても華奢で、いつまでも握っていられそうな、心地の良さだった。

それが僕と彼女、ローディーヌとの初めての出会い。

一生の付き合いになる二人は、まだこれから起こる何もかもを知らない。

でも僕が、彼女が待ち望んでいた自分達の騎士譚はその時間違いなく始まりを告げた。

それをしっかりと分かっていたのはただ一人。

城の陰でこちらを見ながら、嬉しそうな、悲しそうな顔をした侍女。彼女ただ一人だった。

第3話 オレ、あるいは泉の城の姫

「痛っ、あ痛たたた、もう少し優しく」

「ガタガタうるせえなあ男らしくない。シヤキツとしろよ、このぐら
いの傷でみつともないとは思わねえのか？」

「あのね、君の持つてるピンセットは傷に触れないようにガーゼを使
うためのものなんだよ。間違っても傷にねじ込むためのものじゃな
い。半死人だって戦場でそんなことされたら飛び起きて文句を言う
ぞ！」

「し、仕方ないだろ。傷なんて作つたことないし。リユネットは癒し
の術にも長けてるから、そもそも救急箱があるだけでもありがたいと
思えよ！ ていうか、手当てしてもらつといて文句言うな！」

泉の奥の城にある、小さな中庭。稽古にも使つてる場所のベンチ
で、オレは来訪者の傷の手当てをしてやっていた。

最初コイツの姿を見たときには今にも死んじまうんじゃないかつ
て有様だったけど、ボロボロのガラクタと化した鎧を脱がせてみれば
意外に傷は深くない。ただ、数えるのが億劫になるくらいの切り傷、
打ち身、内出血だらけで、ほとんど初めて血を見たオレは少しだけ目
が眩んだ。

「あーくそ、リユネットは何してんだよ。湯ぐらい魔術で沸かせばい
いだろうが」

「なんでも侍女に頼りきりというのは感心しないなお姫様」

「オレはお姫様じゃねえ！ ていうかホント凶々しいぞお前！」

一通りの手当てが済んで、改めてしげしげと眺めてみる。たまに城
の外、街へ出ることもあったが、オレは殆どの時間をこの泉の奥の城
で過ごしている。男なんて、まじまじと見るのは初めてだった。

何処ぞの国の王子様だと聞いたが、なるほど身分卑しからぬ雰囲気は出ている。殆ど半裸で、つまり武装を解いているのに堂々と何ら臆するところがない。騎士たるもの手当てをしてくれてる相手を疑わない、と豪語して佩剣を遠くに放つてみせたことから豪胆な性根が見て取れる。

髪の毛は茶の混じった金髪で、鬘のようにボウボウと四方八方に伸びている。顎髭も生やしているから老けて見えるが、話す感じから察すると意外に若そうだった。

ちなみに彼の城では髭を生やしてなければ一人前とは認められないとか。騎士たるもの髭がなければって、じゃあオレは一生一人前になれねえじゃんか。

「あらあら、お二人とも随分と打ち解けられましたのね」

「リユネット、遅えぞ」

「たかがお湯を沸かすのに、魔術なんて使いませんよ。さあお嬢様、騎士様のお身体を拭いて差し上げなさいませ」

「……へ？ いや自分で拭けよ体ぐらい」

「あらあら、戦いに疲れた騎士様を労うのは淑女の義務でしてよ？」

「オレが騎士になるんだよ！ 別にいいだろ淑女らしくなくなっちゃったって！」

「お嬢様？ 奥様は確かにお嬢様を立派な騎士に育てるようにと仰いました、併せて躰もすっかりと、私は申しつけられておりますわ」

いつになく強気で楽しそうなりユネットが、桶に満たした湯と手拭いを差し出す。

いやでも、傷の手当てはともかく、お、おおお男の身体を拭くなんて。それはちよつと、どうなんだ？ それ本当に淑女のやることか？

ていうかオレが騎士になるんじゃないやなかったのか？ つまりオレの方が身体を拭かれる側になるわけで、いやかといって此奴に身体を拭いてもらうのは死んでもごめんだ恥ずかしい。貞操が危うい、そんな

の淑女のすることじゃねえ。……あれ、じゃあ結局オレも淑女つてことに。

「お嬢様？」

——絶対に面白がつている。そう確信できるのに、その笑顔は絶対笑顔じゃない。

リユネットがこういう顔をしたときは逆らわない方がいい。それはオレの短い人生の中でも骨身に沁みて理解した大原則である。だから仕方なしに、手拭いをよく絞って、素直に体を拭き始めた。

(あ、でも何だか思ったより恥ずかしくないな。てか普通だ)

拭き始めてみれば、それは何の変哲も無いただの作業だった。別にリユネットは労えつていただけで、奉仕しろとは言ってない。丁寧にやっつてはやるけど、それはただの作業だからな。

それによく考えればスカタン卿を、満身創痍になりながらとはいえ、半端に取り逃がしたとはいえ、一人で倒すなんて大した奴だ。少なくともオレよりは全然強いだろう。そう思えばちよつとは労う気持ちも出てくる。

あと此奴が全然恥ずかしがる感じじゃないのも良かった。王子様だから、人に世話されるのに慣れてるんだろうか。よく考えたらオレも寝起きにはリユネットに服を着せられることだつてある。世話されるつてのは騎士の嗜みというか、常識でもあるんだろうな。一端の騎士には従士の一人もつくことだし。

「……なんだい、そんなしげしげと」

「いや、流石に鍛えてるなあつて思つてさ」

「別に、このぐらい普通だよ」

「オレ、この城から殆ど出たことねーからさ。男つつーか、リユネットと母上以外とは口利いたこともねーし」

広い肩幅、風船かよと思うぐらい分厚い胸板。オレの脚ぐらいぶつといの腕。鎧の上からじゃ分かりづらかったけど、熊みたいな奴だ。いや髭面にはよく似合ってるか。この強面で線が細けりや詐欺だな詐欺。

ま、オレには別に立派なガタイは必要ない。魔力を放出することでパワー、スピード共に補うどころか大概の相手は凌駕できるはずだ。そりや強面に比べりや見栄えはしないかもしれないねえが、んなもんは鎧とか、装備で補えばいい。

「そうか……。すまない、不躰なことを言ったかな」

「あ？ 変に氣い回すなよ。単なる事実だろ。ほら、終わったからとつとと着ろよ。ったく、服まで用意させやがって」

「用意したのは私ですが」

「リユネットの苦労はオレの苦労なんだよ。それより服着たらメシにしようぜ、腹が減っちゃまった」

リユネットが用意した男物の服を投げ渡し、立ち上がる。朝方からずっと戦い続けてたんだから腹も減ってるだろ。オレも途中からとはいえ、リユネットの魔術で覗き見てたから分かる。

此奴がこうしてスカタン卿を倒してこの城にいるのは、リユネットの話によれば母上に思うところがあるから、らしい。母上がいったい何を考えてるのか、オレにはさっぱり分からない。例えば短命のオレを産んだ理由も。騎士にする理由も。アーサー王を倒し、王座を奪わせようとする理由も。

でも今までずっと城の中で稽古してたときと比べると、この騎士の来訪は新しい風を運んできた感覚がした。まるで劇の中で、物語が場面転換するような。そんな感じが。

面白くなりそうだ。ただそれだけが確信できる。未だに要領を得ない様子でキョロキョロとしている男の手を引いて食堂へと向かいながら、オレはワクワクとする気持ちを抑えきれずに笑っていた。

「……んだよ、そんな変な顔して」

小さな城の、小さな食堂の、小さなテーブル。こじんまりとした造りは品が良くて、森の中の隠れ城といった感じだった。いや、事実その通りなのだろうが。

4人ぐらいしか座れなさそうな円卓で、僕と彼女——ローディー又は早めのランチを摂っていた。彼女の侍女、リユネットの料理は控えめにいつでも宮廷料理人に相応しい程に美味。物不足、工夫不足、そもそも何か大事なものが抜けているとしか思えない無味——とは流石に言えないが——乾燥なキヤメロットの食事と比べると天と地であった。

「いや、別に。君は乱暴な言葉遣いの割には、しっかり淑女レディだなど思っ
てね」

「なんだよそりや。オレだって好きでこうしてるわけじゃねーぞ。ただ、あまりはしたないことばかりしてるとリユネットに折檻されるかな。もうずっとこうしてるから、あまり羽目を外すと気持ち悪くなるだけだ」

正面に座る少女は丁寧ナイフとフォークを使って肉を切り分け、行儀よく口に運んでいる。僕も彼女自身も口に出した通り、その言動とは裏腹に躰の行き届いた作法だった。

あまりまじまじと見つめるのは不躰だが、面白いお姫様だ。僕も——それなりにしつかり、王宮仕込みの作法で——骨から肉を外しながら、彼女の様子を失礼にならない程度に観察する。

動きやすそうな白いドレスは上品だが質素で、華美ではない。砂金

のようにキラキラ光る髪はまっすぐに下ろされていて、一本一本が午前の陽射しに映える。深い湖の底と同じ色をした瞳は、ぱっちり幼さを残していた。まるで深窓の御令嬢のような風貌は、しかし少女と言うよりは少年らしさで見る人を惹きつける。

「そんなことよりさ、城の外の話を聞かせてくれよ。さっきも言ったけど、オレほとんどこの城から出たことないんだ」

「もちろん構わないよ。と言っても僕もあまり面白い話が出来るほどのことはしてないが……」

「いいよ別に。とにかく何でも、オレには物珍しい話だからな。そうだ、アーサー王の城の話をしてくれよ。一度だけ遠くから見たことあるんだけど、中はどうなってるんだ?」

「キヤメロットか。そうだな、あそこはとても綺麗な城だ。そして何より、たくさんの騎士達の冒険の城でもある」

侍女のリユネットが注いでくれる葡萄酒の水割りで喉を潤しながら、ローディーヌの取り留めのない質問に答えていく。どんな些細な質問、些細な答えにも彼女は子どものように喜び、はしゃいでみせた。城下の、騎士に憧れる子どもたちと同じ反応だ。

お喋りが上手で社交的なカログレナントと違って、僕はあまり人にこういう話をしたことがない。王子として社交会話ができる程度の教養や作法は身につけたが、それも目上の人間としてのもの。人の輪の中で誰かを楽しませるような会話にはほとんど縁がなかった。

だからだろうか。初めての冒険に出て、こうして初めて自分のことを誰かに話す。そしてそれを聞いている彼女が、こんなにも喜んでくれている。単純だろうか。こんな些細なことで、こんなに嬉しく思ってしまうのは。

「それで、何も問わずに歓待を受けてしまったが、そろそろ君たちのことも話してもらいたいな?」

ひとしきり自分のことや、国のこと、キヤメロットやアーサー王について話し、再び葡萄酒で喉を潤して。今度はこちらから質問を投げかけた。

あの泉の騎士——使い魔のような何か——を倒してからこっち、聞きたかった。確かにあの泉の守護者ゴレムは悍ましく、悪性のものだった。しかし僕は侵入者で、言うなれば彼女たちの財産を損失させたわけだ。だつてのにこうやって歓待するつてのは腑に落ちない。

(よく戦った騎士を労うのは貴婦人の義務だつていつても)

そもそも騎士志望なんて自分で言つてたつて、こんな小さな城だからつて、たつた二人で住んでるなんて妙だ。何か事情があるはずだ。なにより僕の勘が。しばしば騎士が運命の風を感じて己を正しい冒険へと進ませるといふ勘が。まだ僕の冒険が終わつてないということを告げている。

「あー、オレ達のこと話すつていつてもなあ」

僕の言葉に、ローディーヌは困り顔で頬をかいた。ちらりと振り返つて傍に控えているリユネットを見遣る。

リユネットはそんなローディーヌの視線に気がつく、静かに頷いた。そのまま淑やかに控えている。好きに話して構わない、ということなんだろう。きつとローディーヌもそう解釈したのだろう。おう、そうか。そう呟いて僕の方に向き直つた。

「大した話にやらねえぞ。オレは母上に言われて、騎士になるためにこの城で修行してるつてだけだ。母上の名前は——モルガン」

「モルガン……まさか、モルガン・ル・フェイ？ ガウエインの御母堂の？」

「ガウエイン……？ その名前、母上からは聞いたことないな。ま、オレ母上とは全然話したことねえけど。リユネットは知ってるか？」

「はい。太陽の騎士サー・ガウエインですね。確かに奥様の息子さんで間違いありません。円卓の中でも、最も強い騎士の一人ですわ」
「太陽の騎士、か。大層な名前じゃなか。……てか兄弟いたのか、オレ」

モルガン・ル・フェイ。

彼女はアーサー王の先王、ウーサー王の娘。つまりアーサー王の姉にあたる。

このブリテン島に満ちる黒い魔力を継いだ、ブリテンで一番の魔女。彼女にまつわる話が多い。そもそも円卓にはガウエイン、ガレスちゃん、サー・ガレリス、鉄のアグラヴェイン卿など彼女の息子、娘が多い。

ただ、一方で彼女とアーサー王にまつわる話にはよくないものばかりだ。彼女はログレスの王位を狙っているという噂を聞く。あくまで噂だが。

アーサー王は即位からこちら、様々な冒険や困難を乗り越えてきた。その災難の多くに彼女が関わっているらしい。かつてアーサー王が聖剣を失くした事件があった。アコロンという騎士の仕業で、彼はアーサー王自身に斬り捨てられた。アコロンもまた、モルガンに唆された騎士だった、らしい。

らしいとか、聞いた話とかばかりで証拠も何もないが……。ガウエインもガレスちゃんも、あまり仲良いわけではないけどガレリス卿からもモルガンの話を聞いたことはない。あまり好きではない、ぐらいは聞いたことがあったか。

「やっぱり、そういう顔するか」

ローディーヌは少し寂しそうに言った。途端、自分が恥ずかしくなる。

そうだ、彼女は別に何も悪くない。母親が悪名高い魔女だったとしても、その娘や息子までが悪く言われていいはずがない。何より自分

の目の前で、母親を悪く言われて気分がいい子どもだっていない。
だというのに僕は勝手にモルガンの名前に身構えて、彼女を傷つけてしまつて。

「そ、そんな深刻に悩むなよ。オレは別に気にしないぜ？ 母上とは殆ど話さないしき！ オレも母上は大概悪人ヅラだから絶対裏で色々やってるなあつて思つてたし！ てか仮にも娘を侍女に任せて自分は育てないとかどうかしてるよな！ そもそも息子ならともかくさ、わざわざ娘作つて騎士になれて、なんだそりやつて感じだし！」

僕はそんなに酷い顔をしてたんだろうか。傷つけた方に、気を遣わせるなんて最低だ。

どんどん侍女のリユネットの顔色が悪くなっていくのが気になるが、ともかく今はローディーヌの親切に乗っかろう。

「あまり、自分の母親を悪く言うのはよくない」

「……なんだよ、気を遣つてやつたつてのに説教かよ」

「悪かった。この話はやめよう。それで、君は御母堂であるモルガンの言いつけでこの城にいるとっ」

「ああ。母上はオレが立派な騎士になったら、キヤメロットに連れていくつもりらしい。何を考えてオレにそうさせるかは——分からな
い。けど、他にやることもないしな。何よりオレも騎士に憧れてるし。そこそこ腕も上がったはずなんだけどな、それがいつかはオレも知らん」

いつの間にか立ち上がつて、傍に置いておいた剣を振り始めるローディーヌ。

一振り一振りが鋭い。体捌きも洗練されてる。才能を約束されて生まれてきた騎士、そんな感じだ。もちろん教科書みたいな丁寧で淀みのない動きは、毎日欠かさず、とてつもない量の修練を積んだから

に違いない。

食事の最中にはしたくないですよ、とリユネットに注意されるも気にしない。もう食事は終わったじゃんか、と振り続ける。この小柄な体躯で、凄い迫力だ。その動き、姿、顔つきには思い出すものがある。我らの王、アーサー・ペンドラゴンだ。

「なあ、どうだ？ オレの剣捌き、どうだった？」

「……うん、素晴らしい。そんじょそこらの騎士気取りに見せてやりたいぐらい、お手本のような、美しい剣捌きだ」

「へへっ、なんか照れるな。リユネット以外、見てくれたことないし。リユネットも別に剣士じゃないからな」

「ん？ ——まさかローディーヌ、君は」

妙な含みを感じて、眉をひそめる。

確かに彼女の動きは素晴らしい。剣も、ちつとも迷いなく振られる様はお手本のようにだと言った言葉に間違いはない。

けれど、それはあくまでお手本。彼女自身の剣技を見るなら、必ず相手が必要だ。そして相手を意識した戦い方をしているならば、普段の、剣の振り方や体捌きにも表れるものだ。

お手本のような剣捌きに体捌き。それに終始してしまうのだとしたら、それは。

「ええ、貴方の考えておられる通りですよイウエイン卿」

「リユネット」

「お嬢様は、実際に誰かと剣を合わせたことはありません。精々が私の操る傀儡……案山子相手の約束稽古だけです」

なるほど、合点がいった。それは、騎士として、戦士としてとても致命なことだ。

腕も、力も、体力も確かに大事だ。基礎も大事だ。でも一番大事なのは実践と経験だ。彼女にはそれが全くと言っていいほど無い。

僕も王子として、小さな頃から剣の稽古はつけてもらっていた。基礎もみっちりやったが、一番多かったのは師範や若い騎士達との打ち合いだ。試合でも何でもいい、誰かと打ちあわなければ剣は上達しないのだ。

「やっぱりダメか。分かってちやいたんだけどな、そういうことは」「ローデイナーヌ、どんな騎士にも初陣はある。みつともなく生き残ったり、命からがら逃げ出したり、そういうのを繰り返し強くなるんだ。積み重ねこそが、強さへの近道だよ」

「いいえ、イウエイン卿。そういうわけにはまいりません。お嬢様には、可能な限り早く円卓に入るだけの実力をつけて頂く必要があります。奥様が、そうお考えなのです」

「……リユネット、君は騎士の何たるかを知らない。あのガウエインだって、ランスロット卿だって、僕だって、はじめから強かったわけじゃない。そんなすぐに結果は出ない」

「いいえ、イウエイン卿。お嬢様はこのブリテンで最高の騎士になる才能をお持ちでいらつしやいます。この城で、十分な稽古ができなかったのは私の不徳の致すところ。ですが、それは機会がなかっただけのことです。機会さえあれば、お嬢様は貴方も驚くほどの速さで成長され、騎士として完成されることでしよう」

「君に何がわかるというんだ。剣も振ったことがないだろう君に」「私には分かります。私にはお嬢様の全てが分かるのです。ですからイウエイン卿、私のお願いを一つ聞いて頂きたいのですが？」

ローデイナーヌを励ますと、リユネットが強い口調で僕に突っかかってくる。一体なんだというのだ。

そりゃあここまで言ってくる侍女がいるなんて、主人冥利に尽きるってものだ。けど、どうにもこの侍女の言葉には力があり過ぎる。にこり、と笑って一歩詰め寄ってくる。そして僕は思わずそれに合わせて一歩後ずさった。

笑ってるけど、全然笑ってない。端的に言って怖い。ローデイナーヌ

も若干ヒいてるあたり、この状態の彼女には逆らわない方がいいのかもしれない。

「お願いを、聞いていただきたいのですが？」

(一つ、がなくなってるじゃないか……！)

さらに一歩、ローディーヌを追い越して僕の前に。かなりヤバイ感じがする。とりあえず、僕の城の侍女にはこんな感じの女ひとはいなかった。

お、おいリユネット、とローディーヌが焦るが気にした様子はない。こうやって近くで見ると、美しい女性だ。どこかの王女様だって言われても不思議じゃない。

燻んだ金髪に、金色の目。血管が浮き出るくらいに真っ白で、張りのある肌。どこかローディーヌに似ている。もしかして遠い血縁なんだろうか。そういう例は結構よくあるものだ。

「お嬢様には実践経験が足りません。ですが、それは経験を積みめばいいだけのこと。今までは私の操る傀儡しかお相手がいませんでした
が——」

——ちようにどいいお相手が、いらっしやるじゃありませんか？

につこり、ではなく。にやり、と。背筋にはしる嫌な予感。

あー、これは絶対逃げられん。どんな言い訳も聞いてくれない、そんな確信が僕の頭を縦に振らせる。

こらそこ、ローディーヌ。君も同じ顔してるんじゃないよ。運命の風は君を巻き込んだに違いない。

多分、僕だけのものだったはずの冒険は。

君と僕の冒険になったに、違いないんだから。

第4話 僕、あるいは泉の城の若武者

「——ヴァン殿！ ゴーヴァン殿！」

あまり聞きなれない、海プロヴァンスの向こうの訛りで呼ばれて振り返る。

キヤメロットの大広間。宴会にも謁見にも使われる多用途な其処は、普段はたくさんの騎士が入れ替わり立ち替わり交叉し、実にめまぐるしい。

そんな人の行き来の中で、一人の若武者が私を呼び止めていた。長い金髪を靡かせ、緑色の鎧にトレードマークの真紅のマントを羽織った円卓の騎士。若草のサー・カログレナント。我が無二の親友、サー・イウエインの従兄弟である。

「ゴーヴァン殿、おひさしぶりにござるな！ 壮健であらせられるよ
うで、結構！」

「サー・カログレナント。卿も元気なようで何より。しかし久しぶりに帰ったかと思えば、また出発ですか？」

「然様さよう。冒険の途中、西の荒野に人食いの化け物が出るといふ噂を聞きつけましてな。これがたいそう愛らしい外見と裏腹に危険だとか。流石に1人では心許なく、こうして2人で退治に出かけようかと思つてござる」

「成る程、それでサー・メレアグランズが居城を出て、卿と一緒にいるのですね」

この若武者は円卓に名を連ねながら、中々キヤメロットに帰って来ない。ほとんど冒険の旅に出ている、たまに帰って来れば我々やご婦人方に冒険譚を面白おかしく聞かせ、また出かけていく。

およそ蛮族退治や侵略者相手に武を振るつてばかりで、冒険に出かける暇がないと嘆く従兄イウエインとは大違い。だがそれが彼の良さでもあ

る。例え大事な会戦に際して、居場所が知れないようなことが頻繁でも。

「……我輩は嫌だと言ったのである。ギネヴィア様に愛の詩を捧げる役目を放棄してまで、荒野で埃まみれにはなりたくないのである。と
いうか城の管理もしなければならぬし、帰っても良いかねカログレ
ナント?」

「心にもないことを仰いますなメレアグランス卿! 共に勇気を試そ
うと、昨夜誓い合った仲ではありませんか!」

「あれはご婦人方にのせられて引き際を誤って、ついでに酔っていて
だね」

「なるほど某を思いやって下さるのでござるな! 冒険から帰ってきたばかりですが、人食いの化け物を放置するわけには参らぬ。某、1
日も早く退治せしめんと胸の内に太陽の燃え滾る心地。ふふ、ゴー
ヴァン殿には申し訳ないが、この胸の滾りは太陽そのものにござる」
「ああ、こいつも人の話を聞かない人種なのである……。ギネヴィア
様、どうか貴女の愛の僕である我輩をお守りくださいませ」

カログレナントの隣にいるのは、紫色に光る青い鎧を纏った騎士。
明るい茶髪を流行りの、後ろに撫で付けた形で固めている。カログレ
ナントよりは幾分か歳上だが、この2人の組み合わせはよく見るもの
で、面白いコンビだと噂である。

往往にして自由奔放やサー・カログレナントに振り回されがちな彼
はサー・メレアグランス。キャメロットにほど近い小さな城の城主
で、アーサー王の覚えもめでたい優秀な騎士だ。彼の城はそもそも王
が任せたものである。

武の方はそれほどではないが、内政を得手としており、アーサー王
の政務を好く手助けしている。ただ、小さく纏まってしまふ悪い癖が
あり、一方で身の程を弁えないところも多々あった。

どれをとつても、良いところでもあり悪いところでもあるわけだ。
それを王は気に入っておられるが、ランスロットなどは露骨に彼のこ

とを嫌っていた。ギネヴィア様へのアピールが積極的で、不敬であるとか。

「そういえばサー・カログレナント。我が友にして君の従兄、イウエインについて何か聞いていませんか？ 暫く前から姿が見えないのです」

「従兄上にござるか？ いや、生憎と某も覚えがござらぬ」

「そうですか。……他の騎士なら、何も伝えずに気の向くまま旅に出ることもありますが。イウエインはそういうことがなかったので、心配ですね」

期待した答えは返ってこなかったが、それも仕方がない。そも彼の、イウエインの一番の親友を自認する私が知らないならば、誰だつて彼の行方を知るはずがないのだ。

イウエインは円卓でも勤勉に王に仕え、特に大きな会戦での戦功が目立つ。ランスロット卿やトリスタン卿など、他の円卓の騎士が冒険や馬上試合の武勇でキャメロットの、ログレスの名を高めているのに対し、純然に戦働きでログレス王国を支える騎士なのだ。

彼が一度戦場に出れば三百の鴉の使い魔で伝令、偵察、諜報、時には陽動まで務め、その魔剣の一振りは三百の刃となつて蛮族を薙ぎ倒す。彼は騎士というよりは將軍に近いが故に、そのような立ち位置を要求される。まず私もそうですが、彼は一国の王子ですからね。

無論その個人の武勇の比類なきことも、馬上試合の強さも誰もが認めるものである。誰にだって引けを取るまい。だが本人は華々しい活躍のないことを少し気に病んでいる風であった。

最後に会った宴では、しきりに冒険に出たいと口にしていた。騎士の本懐は勇氣と強さを証明する冒険、そして美しい貴婦人に愛を捧げることだと。

今時珍しいぐらいにロマンチックな男だ。ランスロットもトリスタンもそういう浪漫に縁深い男達だが、本人達がロマンチックかと思われるか答えには少し困る。だが我が親友は間違いなくロマンチス

トである。

「むむ、なるほど某は合点がいききましたぞゴーヴァン殿」

「サー・カログレナント？」

「常日頃から冒険の風が吹くのを待ち望んでいた従兄^{あにうえ}上は、遂に己の冒険の運命を悟ったのでござる。冒険は探しに行くものでも求めに行くものでもなく、自ずと悟り、旅立つもの。己の冒険を見つけた時、騎士はいてもたってもいられず旅立つものにござる。某のように」

カログレナントはうむうむと、感じ入った様子で頷いた。円卓に華々しい冒険数あれど、その申し子と言うべき若武者の言葉は重い。冒険の専門^{プロフェッショナル}家、旅立つ者の助言者を名乗る彼には確信があるらしい。

勿論あんなに冒険に憧れていた友人が、やっと自らの冒険を見つけた。それはとても良いことだと思う。

「……事故とかで失踪してる、という心配はしないのであるな」

メレアグランス卿の言うことも尤もだが、あのイウエインを脅かすことができるものが早々いるわけないだろう。

便りのないのは、よい便り。あのイウエインは、ふらりと出かけてばかりのカログレナントと血縁なのだ。あまり心配ばかりしていても仕方がない。

「さあメリアグランス卿、某達も冒険へ出かけましょうぞ！ 邪悪な人食い兎を聖なる手榴弾で木っ端微塵に粉碎するでござるよ！」

「待つのであるカログレナント卿！ シュリユードンとはどんな魔剣であるか?! 引っ張らないで！ 外套が千切れるのである！」

ずるずると威勢のいいカログレナント卿に引き摺られていくメリアグランス卿。

私が心配するとしたら、イウエインではなく彼であろう。カログレナント卿はさておき、メリアグランス卿の胃には中々キツイ冒険になりそうだ。

せめて私にできるのは、胃腸に良いように精一杯潰した芋を蒸して差し上げるぐらいのことなのだから。



二度、三度、大きな剣戟の音が響く。

風を巻き込んで唸りを上げる剣閃はガウエインにも匹敵する臂力と速さ。スレスレで躲して、む、少し髭が掠ったか。

ローディーヌの打ち込みを躲し、その隙を観察しながら今は後退り。別に殺し合いじゃなく稽古なのだ。あとで指摘もできるし、今は効率よく剣を合わせていこう。

「へっ、だんだん掴めてきたぜ、お前の動き。いい感じだ」

「そりゃ結構。君もだんだん剣の打ち合いに慣れてきたみたいだな」

「ああ。リユネットの傀儡には癖があつて、慣れちまえばあしらうのは簡単だったからな。リユネットも別に剣士じゃねーし。その点、お前と打ち合うと、なんつーか、興奮するぜっ！」

真つ直ぐ踏み込んで脳天へ一直線。目にも留まらぬ速さだが、動き出しを見れば容易に予測はできる。

本来なら大振りで隙もできるところを、そのパワーで無理やり修正して横薙ぎに繋げてきた。勿論これも一步踏み込み、体当たりで態勢を崩して防ぐ。

「惜しいな、君の太刀筋はあまりに一直線だ、ローディーヌ」

「ちっ、Take that you friend！」

「女の子が下品な言葉を使うんじゃないやありませんっ！」

吹き飛ばされた勢いをそのまま踏み込みの力に変えて、再び上段からの振り下ろし。

曲芸めいた動きは悪くない。太刀筋は素直すぎるが、彼女流に言えば、良い感じだ。だが勿論これでも対応できる範疇の動き。身体を沈み込ませるようにして避け、柄と柄を絡めて剣を弾き飛ばす。

「ッ?!」

「こういう曲芸が効いてしまうのも、素直すぎるが太刀筋が故だね。まあ今日のところはこのぐらいにしておこうか」

「んだよ、俺はまだ全然イケるぜ?」

「1人でやる稽古ならともかく、2人で剣を打ち合わせているんだ。君自身が思ってるより、身体に負荷がかかっている。言う通りに休みなさいローディーヌ」

「・・・ちっ、もどかしいぜ」

「急に成長するものでもないよ剣技なんて。まあ君のセンスは人並みはズレてる。いくつかのコツを身につければ、すぐ上達して次のステップに行けるさ」

練習用の剣を置いて、何も言わずにリユネットが用意してくれた水を煽る。

滝のように滴る汗は久しぶりだ。僕もローディーヌも水浴びしたばかりのような有様で、この一月二月の間は殆ど毎日こんな調子だった。ローディーヌは僕にとって実に良い弟子で、僕はローディーヌにとって良い師匠だったのだろう。そしてお互い、高め合う好敵手でもあった。

事実、ローディーヌはおそろしいほどのセンスに満ちている。およそ1人で稽古して来て、こんなにデキる騎士など他にはいないだろう。

しかし彼女も口では強がっているが、薄々気がついていないはずだ。

自分の剣技の拙さ、覚束なさ、噛み合わなさに。

「ローディーヌ、君の太刀筋はお手本のように綺麗だ。今すぐにでも見習い従士にだって教えられる。けど、君自身とはあまり噛み合っていないみたいだね」

「・・・どういうことだ？　綺麗に剣が振るえたなら、あとは経験の問題じゃないのか？　フェイントとか、読み合いとかさ」

「フェイントも読み合いも確かに大事だけど、一番大事なのはスタイルさ。殺し合い、果し合いってのは、突き詰めれば自分の我儘をどれだけ通せるかにある。自分のペースで戦い、相手のペースにさせない。そのためには先ず自分に合ったスタイルを作らなきゃね」

「オレのスタイル、か」

「その綺麗な剣技、太刀筋はあくまで手本。君自身のスタイルではない。構え方ひとつ、踏み込みひとつにもスタイルで差が出るものだ。僕が思うに、君は分かりやすい型に縛られない、自由奔放な戦い方が似合ってるんじゃないかな」

そう、彼女は窮屈そうだった。型に、お手本に縛られた剣技は身体能力とセンスによって並外れた練度と完成度を持っている。でもそれでは同格、格上の相手には勝てない。容易に対応され、容易にペースを乱される。

もし自分のスタイルを作りたいなら、それがこの時代においてプロフェッショナルの戦闘者である騎士の場合なら、戦いのスタイルとは自分自身の表現でもある。

眩しいぐらいに正々堂々、圧倒的な力と速度で打ち伏せるガウエイン。質実剛健にして精妙美麗、凄烈にして正確無比な剣術を誇るランロット卿。変幻自在、意味不明で何処か気色の悪さすら感じさせる森の妖精仕込みのガヘリス卿。肉を切らせて骨を断ち、傷つくことを恐れない、むしろ悦んでいるかのようなガレスちゃん等々。

ならば僕の見るところ、ローディーヌの剣技は自由奔放、荒れ狂う嵐のようなスタイルにこそ似合う。むしろ基礎がしっかりしている

ぶんだけ、その自由で型に囚われない剣戟は強力になるだろう。

「今までやってなかったことをどんどん試すといい。剣を投げたり、殴ったり蹴ったりしたっていい。自由な発想こそが君の武器になる」
「でもよ、そんなの騎士らしくねえじゃんか？」

「騎士らしき、なんて自分で合点が行くまでは分からないものだよ。騎士道とは一つにあらず、さ」

キングヴァルフ
お祖父様なんて三百本の魔剣のコレクションを間合いの至る所に投げ刺して、それを時には投げつけて戦ってたらしいし騎士らしきって何だっただけだ。

木の枝で戦っても騎士は騎士。弓の弦を弾いたら相手が真つ二つになったって騎士は騎士。……いや実際どうだろうね、ああいうの。まあそれに比べたら殴ったり蹴ったりなんて生易しいほうじゃないかな。

「まあ、いくらでも付き合うよ。リユネットに頼まれたから、じゃなくてね」

「ん？」

「今は僕自身が、君に興味がある。君と一緒にいたいって、そう思ってるからさ」

この子は、真綿に水が染み込むように強くなる。円卓唯一の女騎士、ガレスちゃんも凌ぐポテンシャル。もしかしたら円卓最強の騎士にすらなれるかもしれないという予感がある。

何より一緒にいて、何気ない毎日がこんなに楽しかったのは初めてだ。多分僕は、少なくとも彼女に会うためにこの泉の城にやって来たんだ。

あの泉の試練を乗り越えるためでもなく、赤錆の騎士を倒すためでもなく。

きつと彼女と一緒にいれば、また次の冒険の風が吹いてくる。だから

ら今はそれを楽しみに、彼女との修行に打ち込もう。

いくら彼女が先行き楽しみな騎士だからといって、今のところは師匠として、そうやすやすと負けるわけにはいかないのだから。

第5話 オレ、やがては――

「お嬢様、朝ですよ？ もうお食事の支度は済んでございますよ？」

静かにカーテンが開けられ、朝の光がベッドを照らす。陽射しは暖かく、風は涼しい。この泉の城はいつもこんな良い天気恵まれていた。

生まれた時からだろうか、オレは寝起きが悪い。自分でも分かるぐらいに。リユネット以外に起こされたことはないけど、多分このやり方以外ではまとも起きられないだろう。

リユネットはいつでも最初にカーテンを開けて、オレが陽射しで温まってから窓を開ける。そうして涼しい風でオレの頭が覚醒してから、声をかけてくれるんだ。

それでやつと、オレはベッドから体を起こすぐらいの元気が出る。まだ身体は全然動いてくれない。頭は起きたけど身体は寝てるんだ。ボサボサになってしまった髪に櫛を通し、服を着るのを手伝ってもらって、漸く足腰がしゃんとする。

顔を洗うのはそれからだ。ある程度しつかり起きないで顔を洗うと、びしょ濡れになっちゃうからな。

卓の上には、今日も違う花が飾ってあった。リユネットは花を育てるのが趣味で、畑かつてぐらい立派な花壇がいくつもある。毎朝の決まりで、オレは花卉を一つ摘み取って指先で弄んだ。

…特に、意味はない。花つてのは、そんなに長いこと咲いてられるわけじゃないからな。だから、こうして一番近くに持ち歩いておきたいって思うだけだ。飾られてるだけじゃ、一瞬しか見てられないからな。

「おはよ、リユネット」

「おはようございます、お嬢様。今日も少し早く支度ができましたわ

ね」

「そうか？ 別に、いつもと変わんねえだろ」

「いいえ。イウエイン卿がいらっしやっしてから、段々と色んなことがお一人で出来るようになっておりますよ。やはり騎士たる者、身の回りのことは自分でやらないといけませんものね。リユネットは少し寂しゅうございますけれど」

「そうかなあ……？」

「然様でございますよ。お嬢様のことはリユネットが一番よく存じ上げておりますので」

さ、参りましょうかとリユネットに言われ、歯を磨き、顔を洗って、もう一度軽く髪を梳つてもらってから部屋を出た。

城、というよりは砦か邸やしきに近いだろう。この城はそんなに大きくない。まともに使つてる部屋はオレと、リユネットと、もしものための客室が二つぐらい。あとは倉庫の他にリユネットが魔術の何たらに使う部屋とか、オレの病室ちやうせいに使つてる部屋とか、厨房とか風呂とかだ。

その代わり中庭はすごく広い。陽当たりも風通しも良くて、オレが思う存分暴れまわっても大丈夫だ。この城はそもそもオレのために母上モルガンが用意したものだから、オレに都合のいいように造られているのは当然だった。

「——おはよう、ローディーヌ。よく眠れたかい？」

「ようイウエイン。今日こそはその髭剃ってこいつて言つたら？」

「昨日しっかり断つたはずだろ。僕の城ではね、髭が生えてなきや一人前じゃないんだよ」

「くっだからねえ。そーいうの、男尊女卑つてんだぜ。つかアーサー王だつて生えてねえし」

「だから僕の城ではつて言つただろ。ていうか僕に髭が生えてようがなかるうが君には関係ない」

「見苦しい」

「失礼な」

食卓には既に師匠（仮）がついていた。白湯を飲みながら、のんびりと香草を燃やして煙を味わっている。香を焚くのが流行りつて聞いたことはあるけど、まさか煙を吸い込んで楽しむヤツがいるとはな。変なやつ。

さて、オレが座れば、リユネットは速やかに食事を運んでくれる。といつても朝飯に変わり映えなんてあるはずもない。パンとスープと、少しの果物。これで十分だ。

「君、もつと食べた方がいい。腹が減っては戦働きなんかできないぞ」「燃費がいいって言えよ。食糧だつて今はほら、大変なんだろう？ 省エネ……とか？ しなきゃな。民草ばかり飢えさせないでさ」

「いいや、たとえソレが無味乾燥な穀物や野菜の山でも腹を膨れさせなければ戦えない。戦えなければ民草も守れない。だから食べなきゃいけないんだ。たとえソレが、芋の山でも……！」

「……そんな力説することか？」

……元々オレはそんなに食が太くない。まだ身体が出来上がっていないんだ。外見は一丁前でも、中身が未完成だから仕方がない。

まあ食べ過ぎたら死ぬってわけでもないし、少し多めに食べとくか。リユネットもなんだか嬉しそうにしてくれるし。やっぱ作った料理、残されると悲しいのかな？

「で、今日はどうするんだお師匠様？ イウエイン また午前中いっぱい打ち合うか？」

「……そうだな、そろそろ新しいこともやっていきたいところだ。そういうえばローディーヌは馬には乗れるのかい？ よく考えてみたら君の馬術を見てなかったね」

「UMA……？」

なんとか腹を壊さない程度に朝食を平らげ、白湯で一息ついたら今日一日の作戦会議だ。もうイウエインとの稽古もそこそこ経って、オレ自身でも成長が感じられる。今ではイウエインの奴も手加減を緩め、片手じゃなくて両手で相手してくるようになった。

となると俄然、次の進歩のための新たな稽古が待ち遠しくなる。欲が出る。出し過ぎた時はよくできた師匠が止めてくれるから、オレは思う存分に暴走したって構わない。

そうやって「さあ新たなメニューを寄越せ」と前のめりになったオレに投げられたのは、全く予想外な言葉だった。

「ウマ、か……。いや、乗れるんじゃないかな。乗ったことねえけど。ほら、オレはわりと何でもできるし。騎乗Bとかついててもフツーじゃん？ なありユネット？」

馬、それは予想外。

一回だけ母上にキヤメロットに連れていつてもらったことがあった。その時に馬を見た、ような記憶はある。

というのも、あの日は馬どころか母上とリユネット以外の人間に会うのも初めてだったのだ。この城以外の建物を見るのも初めてだった。街道も店も兵士も、とにかく何から何まで初めてのものばかりで、オレの記憶に鮮やかに残っているのは遠目に見た「理想の王性」、それだけだった。

つまりオレは馬がどういうものなのか思い出せなくて、とりあえず乗り物だということぐらいしか分からなかったのだ。

「そうですね、お嬢様は騎乗Bぐらい持ってらっしゃるはずですよ。馬に乗ることも簡単……とはいかないでしょうが、初めてのことで、でも心配するほどのことではございませんよ？ 初めてのことで、すけど」

「何なんだい、そのアヤフヤな言い方は」

「何分その、ああ何度も申し訳ありません、ですが初めてのことですの

で。私もすっかり騎乗のことは忘れておりました。私はその、あまり動物に好かれませんが。ほほ、ほほほ……」

ちよつと動揺したオレにつられてか、リUNETトも何だか調子が悪そうだ。けどリUNETトがそういうなら、確かにオレには「騎乗の才能がある」のだろう。オレの性能を一番よく知ってるのは、俺じゃなくて母上とリUNETトだ。

で、どうやって練習するんだ？ ぶつつけ本番ってのは流石に無理がある。つーか、この城に馬なんていたか？

「……もちろん馬などおりませんわ。生き物を飼うというのは大変ですのよ、お嬢様。でもご安心下さいませ、リUNETトがすぐに用立て参ります。そうですね、明日には練習を始められるでしょう」

「早いな。まあ善は急げだ、それで頼むぜ。いいだろ、お師匠様？」

「ああ、構わないよ。騎士として登城するなら騎乗は必須だ。戦に出るにも、馬上槍試合に出るにもね」

「……馬上槍試合？」

聞き慣れない言葉に、首を傾げる。すると目の前の髭面は少し意地悪そうに、悪戯つ子のような顔で笑ってみせた。

馬上槍試合はいいぞ。冒険に恵まれなかった僕の唯一の楽しみと言ってもいい。馬上槍試合は騎士の嗜み、使命の一つさ。君もすぐに気に入るよ。

そう言つて、奴は笑ってみせた。



ローディーヌとリUNETトと、僕。師弟とも好敵手とも友人とも言える不思議な共同生活は、思ったよりも長く続いていたらしい。暫くぶりに僕の髭は伸びすぎていて、確かにローディーヌの言う通り、少

し手入れが必要だった。

彼女の剣技は一对一の稽古で教えられる段階を超えた。これ以上は彼女が自分自身で鍛え上げて、必要なら助言をしてやればいい。もう手加減も殆ど——まあ百戦えば百は勝つ自信があるが——必要ないし、最後に教えた馬術も十分な練度に達したと言える。

本当に、ローディーヌはとんでもない才能の塊だった。彼女を主人公にした物語があるなら、それはアイルランドの光の御子のような武勇譚になるんじゃないだろうか。

まだ自分のスタイルを突き詰めてこそいないが、型に囚われずに色々試すようになってからは活き活きと剣を振るう。手癖もそうだが足癖も悪い。大地を踏みしめて戦うよりは、飛び跳ねたり駆け抜けたり、そういう戦い方が合っているらしい。

思い切りの良さはアーサー王に似ているし、嫌味のない爽やかさはガウエインにも似ている。特に我が王、あの方は偶に思いもよらないことをしでかすから、側仕えのベデイヴィエール卿やアグラヴェイン卿はいつも冷や冷やしているのだ。

「しかし君、槍はほんつつつとに下手だな」

「んだよ文句あんのか?!」

「下手は言い過ぎた。それなりに使えてはいる。だからこそ文句だらけだよ。剣を振らせれば円卓の騎士に匹敵する腕前なのに、どうして槍は十人並なのかなあホント」

で、馬に乗れるようになったら次にやらなきやいけないことがある。それは槍の使い方、戦い方を覚えることだった。

馬上槍は合戦の時、騎兵が突撃するのに不可欠の武器だ。もつともログレス王国はもっぱら歩兵が主体で、馬といえは將軍達の乗り物だった。しかも將軍、というか円卓の騎士には槍使いが少ない。特に有名な騎士——ガウエイン、ランスロット卿、ガレスちゃん、ホモ、あと僕とか——は魔剣や聖剣が主たる得物で、槍は殆ど使わない。

ではなぜ僕がこんなにローディーヌに槍の使い方を熱心に指導す

るのかと言えば、合戦や決闘、殺し合いとは別の使い道があるからなの
のだ。

「いいじゃねえか槍なんて使えなくたって。お前だってその鴉の魔劍ケシウエルヒエン
が得物だろ？ 俺も母上に魔劍の一本でも用立てて貰えば……」

「馬上槍試合トーナメントに出られないだろ、槍が使えないと」

「だからなんなんだよ、その馬上槍試合トーナメントってのは！」

騎士の誉れとは何だろうか。

一つは当然、清廉潔白であること。正義を重んじ、正々堂々、卑怯
と悪を許さない。ただ、その振れ幅というか許容範囲については個人
差がある。卑怯ではないが慇懃無礼なランスロット卿とか、
ドMの変態ガレスちゃんとか、ただの変態トリスタン卿とか、ホモとかいるし。

一つは貴婦人を重んじること。貴婦人の頼みはどんな困難であろ
うと断らず、己の愛を捧げるべき貴婦人と出会えたら騎士の本懐と
いつてもいい。メレアグランズ卿なんかは露骨でヒクが。

一つは冒険に出ること。その先で勇敢な騎士の挑戦を受けたり、魔
物を倒したり、悪を懲らしめたりすればなお良い。神の遺した奇跡に
預かるのもこの上ない名誉なことだ。

……そして最後の一つ。これが肝心。

馬上槍試合トーナメントで己の武勇と勇気を示すことだ。

「それ、そんなに大事なことか？」

「勿論さ。馬上槍試合トーナメントはただの決闘や試合とは違う。集中力、筋力、気
迫、馬術、そして何より勇気が試される。だから騎士は挙って
馬上槍試合トーナメントでの名誉を求めらんだよ」

それは槍と盾を構えて、ただぶつかり合うだけに見えるだろう。し
かし、その激突には騎士に必要なもの全てが詰まっているのだ。

互いの全てを、避けずにぶつけ合う。これは本当に勇気が必要なこ
となのだ。いわゆる刃引きした、試合用の槍は使う。けど当たり前こ

ろが悪ければ当然、待っているのは死だ。

もし避ければどうなるか？ 全力で交差するのは、この相手が受け止めてくれると信じているからだ。信じた相手に避けられたら、こちらもただでは済まないのだ。だから互いに互いを信頼して、己の全てをぶつけ合うのだ。

そこには名誉を求めて、名誉を賭けて、騎士が騎士たらしとする瞬間がある。あれは一度味わえば堪らない。一度その「本当」を知ってしまえば、勝つても負けてもいいんだ。観客もそれが分かっているから、勝者にも敗者にも惜しみない賞賛が与えられる。

「馬上槍試合トリーナメントで堂々と戦えなければ、先ず一人前の騎士とは言えない。特に君がもしキヤメロットで円卓に叙されたいと思うならば、ひときわ誉れ高い活躍や戦い方、勝ち方が求められる」

熱く語る僕にアてられたのか、ローディーヌも若干ながら頬を染めて興奮した様子だった。

そうだろう、そうだろう。およそ冒険の風に恵まれなかつた僕にとつて、騎士の名誉を示す機会チャンスは馬上槍試合トリーナメントだけだったんだ。馬上槍試合トリーナメントに賭ける情熱は円卓一と言つても過言じゃない。

「・・・で、実際のところ、どうすりやいいんだ？ 槍の使い方は教えてくれたけど、馬上槍試合トリーナメントのやり方なんて教えてくれねえじゃんか」「こればかりは教えようと思つてもねえ。ただ此処で二人でやつたつて仕方がない。実際に試合が開かれて、そこでやってみないとね」「お前は どうして たんだよ？」

「僕はキヤメロットに登城してからは殆ど彼処から動いてない。だからキヤメロットで開かれる馬上槍試合トリーナメントに出てばかりだった」「じゃあオレもそれに出るぜ！ 優勝でもすりや、アーサー王も円卓の騎士共もオレのことを認めてくれるだろう？」

凜猛な笑みを浮かべ、ローディーヌが槍を振るう。それなり以上に様に

なっているが、まだ青い。剣に比べて槍はどうにも才能が人並みだ。確かにローディーヌの言う通り、キヤメロットの馬上槍試合で優勝ができれば話は早い。そんな騎士をアーサー王が放っておくわけがない。

「……いや、ダメだ。残念だが今の君では役者不足だ。キヤメロットの馬上槍試合はブリテンはおろか、プロヴァンスも含めて一番だ。ローマにもあんなに大きくて苛烈な馬上槍試合はない。君では勝てないし、名を上げることもないだろう」

「オレを見縊ってるのか?! バカにしてんのか?!」

「師匠として、友としての忠告だ。下手に怪我して騎士としての将来を潰す、そんな若者は山程いる。君にはそうなってほしくないんだ」

人生の先達としての真剣な言葉だった。ローディーヌは無鉄砲で考えなしなところがあるが、馬鹿ではない。だから僕の言葉の真実を悟り、口を噤んだ。

しかし分かりやすい結論に飛びついたがるのは彼女の悪い癖だ。僕はできる限り柔らかく笑いながら、口を開いた。

「別にキヤメロットばかりで馬上槍試合をやってるわけじゃないぞ。殆どの騎士は色んなところの馬上槍試合で名を上げていくものなんだ。遠回りにはなるけど、それが確実だ。というか、普通だ。とはいえ一つの城で続けて何回も開くものじゃないから——」

「——成る程な、そこで冒険の旅ってわけだ」

さつきよりも活き活きと、ワクワクとした笑みをローディーヌが浮かべる。僕も同じように笑った。

馬上槍試合の旅。冒険の風に吹かれる旅とは少し毛色が違うけど、騎士にとってはメジャーな旅だ。途中で新たな冒険に巡り合うこともあるかもしれないし、きつと楽しい旅になるだろう。

僕も昔の、居城からキヤメロットに来るまでの、騎士としての最初

の旅は今でも鮮明に思い出せる。実際には何も起こらなかったけど、毎日ドキドキワクワクしながら馬を進めていた。

ローディーヌが、彼女が騎士になりたいならば、それはうってつけの旅になるだろう。そして間違いなく、僕にとっても。

「よし、決まりだな。馬もあるし、準備できたらすぐにも出発できるぜ。あ、でも……」

ふと、ローディーヌが萎れたように振り向いた。視線の先には、微笑みを浮かべたリュネットがいた。

ああ、そうだろうな。ローディーヌにとって、リュネットは生まれた頃からずっと一緒にいた掛け替えのない友人。実の母と疎遠な彼女にとっては母代わりでもあると聞く。

離れるのは、辛かろう。それも騎士の試練だなんて、薄情なこととはとても言えやしない。でも、リュネットは寂しそうにしながらも微笑んでいた。

「……お嬢様は、そう仰られると思っておりました」

「リュネット」

「その先は、仰つてはいけませんよ。奥様はお嬢様に、立派な騎士になってほしいと思つてらっしゃるんですから。剣の修行も十分。リュネットはいずれ、いえ、すぐにでもお嬢様がこの城を去られることは分かつておりました」

「リュネット、いいのか？」

「良いも悪いもございません。リュネットのことは気にせず、お嬢様の心の赴くままに。それがリュネットの願いです。今生の別れでもないのに、どうされたんですか？ お嬢様らしくありませんね」

しよんぼりと、ローディーヌはリュネットの肩に手を置いた。小柄なローディーヌだから、リュネットに縋るような形になる。置いていく方なのに、まるで置いていかれるかのようだった。

そういえば彼女の歳は幾つなんだろうか。ローディーヌはすごく子どもで、そしてゆつくりとローディーヌを抱きしめるリユネットはすごく大人に見える。

「……ローディーヌ様。いえ、〴〵モードレッド卿」

「モード、レッド……？」

「騎士になる方が、淑女の名前では格好が付きませんでしょうか？ 今度からはモードレッド卿と名乗りなさいませ。奥様からの言いつけですわ。女と知られないようにと、ね」

「まだ、あんなこと考えてたのかよ母上は」

「ふふ。さあ、鎧と兜を御用意しましょうね。イウエイン卿、貴方にも。エスカルドス・ザ・ぐり……エスカルドス卿に、鎧は壊されてしまったでしょう？」

「……ありがとう、僕のぶんまで」

あの赤錆の騎士、噛むぐらい長い名前だったのか。

ともかくリユネットはてきぱきと稽古の道具を片付けていく。用意はすぐには整わない。出発は明日の夜明けぐらいになるだろうと言った。

僕はそれは早すぎるんじゃないかなと思ったが、リユネットは聞かなかった。自分だって別れるのは寂しいから、出発は早くして欲しいと。

その気持ちは分からないこともない。だから世話になってばかりだし、素直に彼女の提案を受け入れることにした。

ローディーヌ——モードレッドも、それから同じようにリユネットに従った。それらしい話もせず、いつも通りに夕飯を食べて、いつもより早く起きて出発の用意をした。

二人で馬術の練習をした馬二頭。荷物と兜や盾、槍を積んで、僕達は鎧姿で徒歩だ。新しい鎧は驚くほど軽くて、これなら徒歩の旅も苦勞はしないだろう。僕のは多分、というか確実にあのエスカルドス卿の鎧を直して黒く塗り変えたものなだけだ。

まあ、見送られるのは二人、見送るのは一人。だから旅立ちもこんなものなのかもしれない。

「……ああ、お二人とも。一つだけリユネットと約束をして下さいまし」

朝靄に霞む門の向こうに、泉に繋がる道が見える。

小鳥の囀りも、虫の声もない静かな朝。じゃあ行こうか、という時。今までになく真面目な顔で、どこか怖く感じるぐらい真剣な様子で、リユネットは言った。

「二年です。必ず一年経つ前に、一度は戻ってきて下さい。絶対に約束して下さい。お嬢様、リユネットがここまでお願いする理由は、お分かりですわね？」

「……ああ、わかってる」

「イウエイン卿も、お約束してください。必ず一年で、お嬢様を連れて帰ってきて下さいまし。理由はどうぞ、お尋ねにならないで」

モードレッドは寂しげに頷いた。リユネットの真剣な様子と、いつになく殊勝なモードレッドの様子。何かある、とは思った。けど僕はこの二人がたまらなく好きだったから、何も言わずに頷いた。

ブリテンはそんなに広くない。一年もあれば当初の目的を果たすには十分な期間だ。僕はそんなに旅慣れた方じゃないが、カログレナントから色々聞いている。よく注意すれば、きっと大丈夫だろう。

「くれぐれも、お願いします。お二人とも、どうぞ無事にお戻りくださいませ。少しの間、リユネットは暇を頂戴しますが……お帰りを心からお待ちしておりますわ」

ああ、またな。元気でね。そんな簡単な別れの言葉を残して、去っていく。

すぐに城は霧の中に消えて見えなくなってしまうた。泉も同じように、通り過ぎれば消えていく。まるで魔法のように、夢のように。確かなのは、僕の着込んだ——おそらく魔法の——鎧。それと隣を歩く新たな相棒の姿。

寂しそうな表情は消えて、毅然と前を向いて歩いている。なんとも頼もしく、危なっかしい新米騎士。でも旅立ちを経て、それだけで成長した一番弟子。

僕の下に冒険の風を吹き込んでくれた彼女を連れて、一体どんな旅になるんだろうか。そして旅を終えた時にも、きつと何かが待ってるはず。

やがて晴れ渡り、姿を見せる青空を二人で眺めながら。今しばらくの間は言葉もなく、僕らは冒険の旅へと歩き出していったのだった。

第6話 オレ、あるいは花びらの騎士

政務が終わり、キヤメロットの回廊を一人で歩く。白亜の回廊は寒々しく、しかし職人達が力を振るった細工があちらこちらに施してあって荘厳であった。

ログレスは未だ蛮族や海の向こうの国の侵略者に脅かされている。しかし王として、戦以外にもやらなければいけないことは山積みであった。優秀な政務官達のおかげで何とかなっているが、やはりこういうことは向かない。昔から騎士に憧れて剣を振り回すことはあっても、王に憧れたことはなかったから。

ああ、いけない。別に言い訳をするつもりはない。王になることを決めたのは、私なのだから。苦手なことがあっても、出来ないことがあつたとしても、騎士達や政務官達の力を借りる。そして責務から逃げることだけは絶対にしない。

そうしなければ、この王国をまとめ上げることなどできはしないのだから。民草が求めた王性だから、というだけではない。そうしなければ騎士達はまとまらず、そしてこの国は滅ぶだろうから。

「――アルトリア」

誰もいない回廊に、声が響いた。昔、聞きなれた優しい声が。

柱の陰に、闇が佇んでいた。靄のような、影のような。質量はなく、その空間を塗りつぶすように。開いた扉の陰、微妙に蓋のずれた箱の中のような先を見通せない闇。

そして其処から姿をあらわす一人の女性。現れるまでは全く気配を感じさせず、現れてからは誰もが目を惹かれる美しい女性。

「姉上……」

燻んだ金色の髪と、神々しい魔力を放つ瞳。被った薄いヴェール越しにも、その美しさは見るものを惹きつける。

モルガン・ル・フェイ。かつての義理の姉にして、今は実の姉。そしてブリテンのだれもが忌み嫌い、アーサー王の仇敵として知る魔法女。

私たち2人の他に誰もいないキャメロットの回廊で、姉上は我が家にいるかの様に自然体だった。かつて共に過ごした小さな屋敷にいた時の様な優しい微笑みを浮かべて近づいてくる。

「ああ、アルトリア。久しぶりですね…少し、痩せたかしら？」

姉の方が少し背が高く、ヒールも履いているから、彼女に抱きしめられると包み込まれているかのようだった。私は姉に抱きしめられるのが好きだった。

私が無防備でいられる、数少ない人達。義兄ケイと義父エクター卿と過ごしていたときのことばかり思い出す。あの2人と血縁も何もないくせに、この姉は嫁に行った異母姉だとかよく分からない理由をつけては屋敷に遊びに来ていた。足繁く、夫君はどうしたのだと呆れるぐらいに。

高貴な出自なのに家事が得意で、料理も裁縫も誰よりも上手にこなした。姉の作る料理は私の好物だったし、私の服は殆ど姉が繕ったものだった。姉の寝物語で、何回床に就いただろう。彼女は今も昔も私に惜しみなく愛情を与え、私はそれを只々享受するばかり。

「痩せてなど、いるわけがないじゃありませんか。私は聖剣を抜いたんですから」

「いいえ、確かに痩せました。食事も睡眠も、ちゃんととれていないのではありませんか？」

「そんなことありません」

「嘘を仰い。ケイから全て聞いております。妾はお見通しですよ、アルトリア」

あの義兄^{ケイ}は本当にお喋りだ。

普段悩まされている分が舌打ちとして漏れ、またクスリと笑った姉に抱きしめられる。

この人が、こんなに優しくして愛情豊かな人が、世間で忌み嫌われている魔女だと誰が信じるだろうか。私は姉から与えられる心地よい愛情を拒めない。それは魔性でも何でもなく、本当に純粋な愛情だからだ。

世間は言う。モルガンは悪女だ、魔女だと。

モルガンはアーサー王を憎んでいると。とんでもない。

モルガンはアーサー王の敵だと。まさか。

モルガンはアーサー王を亡き者にしようとしていると。誰がそんなことを。

「……どうかしましたかアルトリア？」

モルガンは王位を狙っている。

モルガンはアーサー王の聖剣を奪おうとした。

モルガンは卑怯にもアーサー王から宝を、聖剣の鞘を奪い取った。

モルガンの奸計によって何人もの騎士が命を落とした。

モルガンは円卓に不和を呼び込もうとしている。

モルガンはブリテン島を守護する役目を帯びながら、ログレスの王国を滅ぼそうとしている。

「姉上、貴女はまだ」

何故こんなに優しい姉上が、こんなことをしているのか。

私を王位から引き摺り落とし、ログレスの国を滅ぼそうとしているのだろうか。優しい顔と声で奸計を謀り、騎士を殺し、悪逆非道を行うログレスの敵、ブリテン島の魔女。そう言われるようになってしまったのか。

本当は分かっている。姉上がどんなに私のことを想ってくれてい

て、そしてその愛が故に私を王位から下ろそうとしていることを。でも私はそうはできないから。王であることをやめることはしないから。だから姉上は苦しんでいて、私もまた姉上に苦しまされる。

何が悪かったのか、誰に聞くこともできやしない。私はブリテンを救うために王位に就いた。それは絶対に間違っていないと信じている。けど姉上はそうは思ってくれないのだ。

「姉上、私は大丈夫です。今は大変ですが、騎士たちはよくやってくれています。蛮族退治も進んでいますし、アグラヴェインが内政を見てくれていきますから、いずれ国も豊かになります。今は無理でも、いずれ必ず。ですから」

もう、こんなことはやめて下さい。

何回でもそう言いたかった。けど言えなかった。今も、昔も。

私は未だに恐れているのだ。私だけが円卓で、モルガン・ル・フェイは魔女であると、ログレスの敵であると言えていないのは、姉上と決定的に対立することを拒んでいるからだ。

やめて下さいと、言ってしまうえば認めてしまう。姉上がログレスの、アーサー王の敵であると認めてしまう。それがたまらなく怖かった。私は臆病者で、子どもだった。誰にも甘えられない、そんな大人なら当たり前の事実を認められない我儘な子どもだったのだ。

「アルトリア、貴女は分かっている」

「姉上」

「貴女には必ず、王位を退いてもらう。それが妾の唯一つの望み。貴女も救う、ブリテンも救う。それが貴女の姉として、ブリテンの黒き魔力を受け継ぐ妖精としての妾の務め。アルトリア、貴女は——」

「やあアルトリア、こんなところでどうしたんだい？」

涼やかな声がした。

つかみどころのない、飄々とした、誰にも関係なく幸せが完結した

ような声が。

「マーリン……ッ!!」

姉上の口から漏れる、背筋も凍るような声。黒いヴェールの下で読めない表情が歪んだのが分かった。

もはや優しい姉上はいない。ブリテンの魔法の姿、私が滅多に見ない姉上のもう一つの姿があった。

「これはこれは、誰かと思えば子沢山の魔法殿じゃあないか。こんなところで不用心だなあ。誰か、そう、円卓の騎士の一人にでも会ったら大変なんじゃないかなあ」

「ぬけぬけと、このひとでなし。貴様こそどの面を下げた妻の前に出てきたというのか」

「おやおや、それは私の台詞だよモルガン？　今言った通りさ。君も、どうやってこの城に入り込んだのやら。ダメだよアルトリア、怖い魔法に声をかけては。君はこの国の王なのだから、魔法に気を許してはいけないだろう？」

この二人はあまり出会うことはない。けれど、出会ったら必ず諍いを起こす。地の利を味方につけたマーリンが速やかに手を下し、姉上は去る。

今日も既に手はずを整えてから現れたのだろう。回廊の先で騎士たちの声がする。

彼らが姉上を見つければ大騒動だ。憎々しげにマーリンを睨み、姉上はゆっくりと陰へと後ずさっていく。

「アルトリア、妾は諦めません。必ず貴女を救い出す」

「余計なお世話だよモルガン。君のそれはね、とても無様でみっともない。見るに耐えない、下がりなさい」

「花の魔法師、覚えておくといい。いつかその滅らさず口を妹に聞かせ

なくしてやるわ……！」

「君もいい加減子どもごさえるのやめなよ、いい歳だろう？」

「ほんつとうに覚えてなさいよ！　いつか何処ぞに幽閉されてから泣いて謝っても妾は許してあげないのだからね!!」

ゆらり、と陰の中へ姉上が消える。手を伸ばして探っても誰もいはいない。最初から其処には何もなかったのだ。そうでなければならぬ。

マーリンから何を聞いたのか「変質者が出たと聞きましたが無事ですか王よ」と騎士たちがやってきた。変質者シスコンなどいない、マーリンの気のせいだったという、またかと呟いて去っていった。

姉上はいつも、私を不安にさせて去っていく。誰も信じて疑わずに努力して勝ち取ろうとしている未来を、姉上だけが信じていない。願わくば、姉上も同じように未来を信じて共に歩んで欲しい。そう言う、とマーリンは何も言わずに嗤った。

私か彼女か、どちらかだよ。そう言っ彼も去っていく。一体どういう意味なのだろうか。

政務に追われ、戦に追われて、私は何か大事なものを勘違いしたまま進んでいるのかもしれない。それでもブリテンは、何もしなければ滅びてしまう。

言いようのない不安がまた、いつものように私の胸をかき乱す。けれど歩みを止めることはなく、また、明日はやってくるのだ。



「っしやあ！　見てたかイウエイン、また勝ったぜ！」

拍手喝采が響く試合場から、意気揚々とモードレッドが帰って来た。

互いの手甲がガシヤリと小気味好く打ち鳴らされ、それから待ち望んでいたかのように急いで兜を脱ぐ。汗のかきかたは水泳でもして来たのかと言われてしまうぐらいだ。べったりと額に張り付いた前髪を退かしてやると、やはり満面の笑みだった。

馬上槍試合は短い時間に、恐ろしいまでの体力を消費する。その一瞬で勝ち取った勝利に注がれる栄光は他の腕試しとは桁違いだ。勝利を噛み締め、酔いしれる姿は美しい。普段の子どもっぽい様子とは打って変わって、モードレッドにも戦士の色気が醸されてきたようだ。

もちろん僕もその前の試合でしっかりと相手を地面へと放り投げてきた。今日の試合は優勝者を決めるものではなかったから、彼女と争うこともない。

まあ今回の旅は我が弟子、モードレッドの名声を高めて名前を売ることが目的で、僕の勝利は二の次。とはいえ馬上槍試合からあまり長く離れていても勘が鈍るから、彼女とかち合わないようにコンスタントに、僕も勝ち星を拾うようにしている。

最初の内は危なっかしい試合ぶりも多かったが、もう心配する必要もないくらいに彼女の腕前は上がっていた。この仕上がりならば、円卓の騎士と試合をしたって鎧袖一触とはならないだろう。本当に、羨ましいぐらいの才能と、強さに懸ける情熱の燃え上がるような熱だ。

「お疲れ様、モードレッド。これで何勝目だったかな？」

「んなもん数えてねえよ！ 何回勝ったかなんて名声には関係ない。そう言ったのはお前だろおが」

「違いない。とはいえ僕らの名声も十分以上に高まった。これは事実だ」

「応。んじゃ別に表彰式があるわけでもねえし、とつとズラかろうぜ。このままだとまた揉みくちやにされちまう」

「そうだな。馬は引いてきてるし、食料も水も補充できてる。さっそく城を出るとしようか」

モードレッドの言葉に従い、馬に飛び乗って揚々と城を出る。

最近彼女は彼女に話した通り、僕らの名声の勢いは留まるところを知らず、姿を見られたら民衆や騎士が集まってきて前にも後にも引けない有様だった。旅の途中に次に向かう城から使者が来て、馬上槍試合^{トーナメント}への参加を請われることすらある。一夜の宿を頼んだ村では子ども達から冒険の話がせがまれて大変だった。

名前をことさら売ったつもりはない。この時代は氏素性を明かさないうまま試合に出るなんて珍しいことじゃないから、特別にと聞かれなければ名乗ることはしなかった。

でも僕も彼女も非常に目立つ魔法の鎧を着込んでいるから、どこにいたって噂はひっきりなしに聞く。黒騎士と、花びらの騎士。黒い鎧が迷惑なくらい——多分リユネットの嫌がらせだろう——輝く僕と、兜に花を挿し込んで飾る癖のあるモードレッドの呼び名だ。彼女はこう見えて結構可愛いというか、少女らしいところがあった。

今も道すがら彼女の噂を聞きつけて庭から花を摘んで来た少女から受け取ったものを、モードレッドは楽しそうに指でいじっていた。そして飽きたらすぐに捨ててしまう。ものに頓着しないというか、いっそ虚無的なまでの潔さは彼女の魅力なのだろう。

「なあイウェイ、次はどここの試合に出る？ ローマの方は馬上槍試合^{トーナメント}じゃなくて戦車競技が盛んだっていうし、いっそ北のほうに足を伸ばしてもいいんじゃないか？」

「戦車競技か。ローマも戦車を使わなくなつて久しいが、未だに競技としては健在で盛んだと聞くだけは。出ることはなくとも、観光には行ってみたいところだな」

モードレッドも随分と旅慣れた様子で、次の行き先を話す姿はワクワクと楽しそうだった。生き生きとしている彼女は太陽のようだった。元氣よく、輝いていて、いつまでも見ていたくなる。一緒にいたくなる。

前から思っていたことではあるが、彼女には王気を感じる。アー

サー王と体格や声が似ているからだろうか。僕は王子たる身分で、武者修行のためにキヤメロットにやってきた。だから揺るぎない忠誠をアーサー王に寄せているわけではなく、余計にそう感じるのかもしれない。

「……しかしモードレッド、もうすぐ旅に出てから一年経つ」

彼女と共に旅をするのは、とても楽しい。だけど僕たちは一つの約束をしてからあの泉の城を出発したはずだった。

高ぶっていた感情が急激に下がる気配がした。ちよつと拗ねたよ
うな、哀しいような顔をしたモードレッドがゆつくりと馬を進ませ
る。初めて馬上槍試合^{トーナメント}で負けた時は、こんな感じではなかった。荒れ
狂うような熱を押し込めるかのように、無言でいるのが彼女だった。

しばらく、引き返すわけでも進むわけでもなく、ただ馬に任せて歩
を重ねた。不思議だった。もう十分に名声を高めることができた。
だから帰ることに、何も躊躇いなどないはずだった。

「何か別の悩み事でもあるのか？」

「……ん。まあ、な」

「二人っきりの旅なんだ。どんな愚痴でも、聞いてあげるさ。話せない
ことなら構わないが」

「話せない、とか、話せるとか、そういうもんじゃあねえんだ。ただな、
お前に言われて、久しぶりに気がついたこともあつてさ。自己嫌悪、
ともちよつと違うか。ヘンな気持ちになつちまつてさ」

だんだんと日が暮れはじめていた。森を抜け、草原に出れば遠くの
山にかかった夕陽が草原を照らし、朱色に染め上げている。

それは血のような、花のような、炎のような色だった。そして彼女^{モードレッド}
の色だった。朱に染まった草原を見つめる彼女の瞳にも、同じ色の炎
が揺らめいている。それはいつもの、激しく燃え上がる炎ではなく、
静かに小さく、それでも懸命に燃える薪の灯りだった。

はじめに彼女のことを心の底から美しいと思った。何かで形容するような詩的な感覚ではなく、脳髓を戦鎚で打ち据えられるような衝撃だった。

「母上のこと、知ってるだろ?」

「……モルガン・ル・フェイ。勿論知ってるよ。前に君が話してくれたじゃないか」

「まあな。あん時も少し話したけど、どうしても母上は普段の行いが悪いから、きつと誰だつてオレのことも嫌がるだろうなあつて思ってたんだ。だから気にしないって言い切ってくれたときは——嬉しかったよ」

「別に大したことじゃないだろ、そんなの」

「そうか。ま、お前がどう思ってるかとかはいいいんだ。ただ、すまねえなあと思つてさ」

「……どういうことだ?」

柔らかな風が頬を撫で、静寂を運んでくる。誰もこの世にいないんじゃないかと思わせる静寂は、ある意味旅の醍醐味だ。

そんな静寂を確かめてから、モードレッドは再び口を開いた。

「——母上は、オレを王位に就けようとしているんだ」

「何?」

「アーサー王を王位から引き摺り下ろすために、今度はわざわざオレっていう手駒を用意したつてわけさ。母上にとつてオレはアーサー王への復讐の道具だ。オレは母上から、何ら親子らしいことをしてもらつたことはないんだ」

「だから、すまないと言つたのか」

「ああ。信じてくれて嬉しかったけど、オレは母上の手先だからな」
「君は、君はそれでいいのか。それが間違つてるって思うなら、どうして手先だ道具だなんて開き直ってるんだ。言いなりに、なってるんだ」

なんだ、そんなことかと、朱色の草原を背にモードレッドは言った。

「それが真に悪いことなのか、オレには分からない」

オレは空っぽだから。

寂しい風でも、憤っている風でもなく、モードレッドはただ事実を口にした。

生まれてから殆どの時間を泉の城で武芸の修練に費やして過ごした自分には、そういう判断をする能力が備わっていない。性格も感情も育ったのに、自分で自分の道を決める、一番大事な判断をする能力に欠けている。そう言った。

僕はそうは見えなかった。激しく強く、思うが俣に生きるのがローディーヌあるいはモードレッドという人間だと思っていた。それはそうなのかもしれないけど、と彼女は念を押して続けた。

「世間様の常識だとき、母上の方が悪いんだらうよ。そんなことは分かってる。だからホントは逃げてるだけなのかもしれないな」

母上はオレのことを認めてない。でもオレを必要としていて、頼っている。何も母親らしいことをしてくれちゃいない母上だけど、それは、オレは嬉しく思うんだ。リユネットも母上と同じように、オレを頼っている。頼られている。頼られている。

モードレッドの言葉は要領を得ないようできて、ものすごく素直に彼女の悩みを伝えてくれた。これを聞くのが僕でよかった。僕はアーサー王に揺らぎない忠誠を誓った騎士ではなくて、武者修行の場として円卓に座っている、忠誠心の薄い騎士だから。

「でも、お前と旅するのは本当に楽しかった。そういうしがらみめいたこと、変な悩み、何も気にしなくてよかったからな。帰らなきや、つて考えた時、それから逃げかけた。楽しかったから、その先を考え

るのが嫌だったんだ」

戻ったら、彼女はどうするのだろうか。

モードレッドの、花びらの騎士の名声は円卓の騎士として何ら不足ないものだ。彼女が円卓に名を連ねることは、モルガンの思い通りなのか。それはブリテンにとって、僕にとって、そして彼女にとって良いことなのだろうか。

「……この草原、超えたらもう一つ城があるだろ？ そこの馬上槍試合を最後にしよう」

僕はただの騎士で、若すぎた。彼女の複雑で率直で、そんな悩みに何も答えてあげられない。だから出来ることは、少しだけ彼女の思いを汲むことだけ。

モードレッドは僕に何を求めていたのだろうか。斬り殺されたっておかしくない真実を、悩みを告げて。でも彼女はさっきまでの顔が嘘のように、応と笑った。

何よりも好きになったはずの顔なのに、どこか哀しかった。

彼女と同じように、僕も逃げていたんだ。

何も考えずに馬を進ませる、楽しいだけの毎日に浸っていたのだ。

初めての冒険に浮かれていた。そして知らなかった。

それこそが冒険の甘い誘惑と、罠だったのだ。

登場人物紹介

【クラス・】セイバー

【マスター】

【真名】サー・イウエイン

【性別】男

【身長・体重】180cm・81kg

【属性】秩序・善

【ステータス】筋力B

耐久B

敏捷B

魔力C

幸運C

宝具B

【クラス別スキル】

対魔力：B

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。

大魔術、儀礼呪法等を以ってしても傷つけるのは難しい。

騎乗：B

騎乗の才能。大抵の乗り物なら人並み以上に乗りこなせるが、魔獣・聖獣ランクの獣は乗りこなせない。

【固有スキル】

遍歴の運命：B

多くの騎士が背負った運命の1つ。中々一つ所にとどまることができない業。挑戦の象徴。

自軍に有利な陣地以外での戦闘、不利な条件にあったとき有利な補正がつく。

泉の騎士の鎧：B

ブリテンーの魔女、モルガンが作成した鎧。非常に頑丈。あと黒光りして目立つ。

宝具として使う場合は『一赤錆びた黒・鉄の鎧〈アーマー・オブ・エスカルドス・ザ・グレート・タイフーン・エクセレント・ガンマ〉』となる。長い。

【宝具】

・『黒く貴き鴉の濡れ刃』
ケンヴェルヒエン・ブラックウインド

ランク；B 種別；対軍宝具 レンジ；不明 最大捕捉；300人
祖父キングヴァルフがコレクションしていた三百本の魔剣と三百羽の鴉の使い魔。

彼の魔剣はこのコレクションの融合したもので、真名を解放すれば三百の剣に、三百羽の鴉へと変わる。

鴉の使い魔は一羽一羽が一人前の戦士に匹敵する力を持ち、諜報などに使うほか弾丸のように飛ばすこともできる。

また一振りの斬撃を三百に分裂させるなど、多数を相手取るのに適している。

『重束斬空・黒耀大翼』
ケンヴェルヒエン・ブラックモア

ランク；B 種別；対人宝具 レンジ；1〜5 最大捕捉；不明
三百本の佩剣を一振りの斬撃として放つ獅子の騎士最大最強の奥義。

重ね、束ねられた斬撃はさながら巨大な鴉の翼のように見える。

・『吾が名は獅子を連れた騎士』
ル・シヴァリア・オ・リオン

ランク；B 種別；対人宝具 レンジ；1 最大捕捉；1人
共に勲を挙げた無二の親友たる白獅子の召喚。

ケンヴェルヒエン以上にサー・イウエインを表す、彼そのものと言える宝具。

彼を戦いのために喚び出す条件は二つある。まず相手が自分より多いこと。次に相手が自分より強いことである。

【解説】

ウリエン王の嫡子にして円卓の騎士の一人。ガウエインの親友にして好敵手。

オウエイン、ユーウエイン、イヴァンなど様々な呼び方があるが、最も有名なのは『獅子を連れた騎士』。

髭面に熊のような体躯と、中々円卓にもいない漢くさい風貌。一方ロマンチストで、騎士道に憧れる若い騎士でもある。

祖父譲りの収集癖があり、武具や押し花、美しい鳥の羽などをコレクションするのが趣味。

円卓の騎士としては遅咲きで、長らくアーサー王の下で將軍として戦働きをしながら、やがて妻ローデイーヌを巡った一連の冒険で名を馳せた。この大恋愛はトリスタンの物語に匹敵する人気を誇るが、この結婚は彼女が正体を偽ってキャメロットに騎士としてやってきてからのものであるほか、ほとんどが事実をもとにしたものだった。

將軍、王子らしく包容力があり気遣いも利く。しかしプライドが高く、見くびられると思わずカツとする激情家である。

彼の最後には諸説ある。ガウエインの冒険の途中で他人に間違われて殺された、祖国へ戻り王位を継いだなどだが、実際には……？

【クラス・】セイバー

【マスター】

【真名】サー・カログレナント

【性別】男

【身長・体重】168cm・68kg

【属性】混沌・善

【ステータス】筋力D

耐久B

敏捷B

魔力D

幸運・A

宝具C

【クラス別スキル】

対魔力：C

騎乗：C

【固有スキル】

遍歴の運命：A

多くの騎士が背負った運命の1つ。中々一つ所にとどまることができない業。挑戦の象徴。

自軍に有利な陣地以外での戦闘、不利な条件にあったとき有利な補正が見つく。

聖遺物の加護：B

聖アツティラの加護を持ち、キリスト教圏の奇跡に対して有利な補正を持つ。また邪悪なもの、理不尽な運命への抵抗力がある。

仕切り直し：B

自分に不利な状況にあるとき、戦闘から離脱する能力。彼の場合は逃げ足の速さ。あるいは敵が見逃してくれる確率が非常に高い。

【宝具】

・『約束された破壊の鋒』

ランク；C 種別；対獣宝具 レンジ：不明 最大捕捉：罪深き多

数の敵

旧知のメイラード神父から借り受けたシユリユーダンの魔剣の奥義。

聖アルテラの加護が与えられた鋒。肉、各種野菜、香辛料、オートミール、フルーツの種等が原料。

魔剣なのに聖なる加護があるのはよくわからない。虹色に輝いていて、鋒だけぐるぐる回る。

柄に仕込まれた封印を引き抜いたあと、3つ数えて振りきることで鋒だけが飛んでいき炸裂する。

4つでは遅過ぎ、2つでは早すぎるので、必ず「23」「23」と数えること。

【解説】

サー・イウエインの従兄弟。緑色の鎧と真紅のマントがトレードマークで、『若草のカログレナント』とも呼ばれる。

自分のことを某と呼び、語尾に「ごぎる」などをつけて話すいかにもな変人。しかし性根は実直で誠実、民草のためならば危険な冒険にも進んで向かう勇敢な若者。

冒険の旅に出てばかりでキャメロットには殆ど居着かない。蛮族退治も侵略者との戦争にもいなくて、殆ど仕事してないようなものが何故か愛され、許されている。

腕前はお世辞にも強い、とはいえない。円卓の騎士としての實力は十分にあるが、あまりに波乱万丈な冒険には彼程度の腕では太刀打ちできないので大概の冒険で失敗、逃げ帰っている。

その荒唐無稽な冒険譚は誰もが聞きたがり、彼の名誉を疑う者は一人もいない。

【クラス・】セイバー

【マスター】

【真名】サー・メリアグランズ

【性別】男

【身長・体重】175cm・66kg

【属性】混沌・善

【ステータス】筋力C

耐久C

敏捷B

魔力C

幸運・D

宝具C

【クラス別スキル】

対魔力：C

騎乗：C

【固有スキル】

内政：B

領地をどれだけ栄えさせることができるかを表したものの。小さな城と、その周りぐらいの領地ならば十分に治めることができる。

拠点を持つ場合、戦闘前後のフェイズが長いほど戦闘に対して有利な補正を得ることができる。

横恋慕の哀愁：C

望むものを手に入れられない運命。恋敵に対して有利な補正を得るが、その場に横恋慕の相手がいる場合は逆に不利な補正を得る。

呪術：B

不調や報復に用いる古い魔術を扱うことができる。彼は騎士であるため、その行使には非常に大きな代償を要する。

無辜の悪役：・A

未来の創作やイメージによって在り方を捻じ曲げられ、先んじて生前に過酷な運命を背負うことになってしまった悪役。未来に約束された創作により、彼は悪役を約束されてしまった。

【宝具】

・『^{ピトレイザ・クイーン}王女の誘拐・剥奪武具』

ランク；C 種別；対人宝具 レンジ：1 最大捕捉：1

王女に立てた守護の誓い、愛が捻じ曲げられてしまったもの。本来は『臣は誓う無償の愛《セイブ・ザ・クイーン》』という名であった。

対象に所縁ある人物を誘拐し、人質にとることで対象の武具を剥奪することができる。所有権は奪えないが、人質が取り返されるまで対象の武具は使用できない。

ただし剥奪するのは武具のみで、逸話が宝具になったもの、体質が宝具となっているもの等は無効化できない。

【解説】

アーサー王にキャメロット近くの小城を任された騎士。内政に優れ、詩を愛し、何より王女を愛していた。

後の世でランスロットの敵役とされていた。アーサー王伝説は後世の影響をあらかじめ受けやすく、彼もまた悪役であることを運命づけられてしまった。

カログレナントとは腐れ縁、というか彼に振り回されるのが常で、口では嫌がりながらも何だかんだ付き合ってしまうお人好し。民からは良き領主として慕われていて、同僚たちからも憎めない小物っぷりを愛されていた。

第7話 オレ、ついに人形のごとき騎士

キヤメロットの荘厳な城壁に囲まれた中庭では、今日も多くの騎士たちが稽古に励んでいた。兵達の調練は、今日は何人かの將軍たちによって城の外で行われている。蛮族たちとの度重なる戦を経ても、我が軍の士気は軒昂であった。

剣、槍、様々な得物で互いに打ち合う騎士たちを眺めながら、愛弓の弦を爪弾く。便宜上、弓に張ってはいるが此れは弦こそが魔法の武器。故にこうして、何本も番えるという不可思議な使い方をするのだ。

しかし武器である以上は乱暴な使い方もする。であれば整備も欠かすことはできず、音楽を奏でる道具として使うとき以上に気を遣っていた。

「トリスタン卿」

「これは、ランスロット卿。今日も精が出ますね」

ふと顔を上げると、そこには上半身裸で、湯気すら見えるほどの汗をかいた偉丈夫の姿。

湖のサー・ランスロット。円卓随一の騎士として名高い同僚は鍛錬を欠かすことはない。趣味は鍛錬、たまに礼拝と周囲に言われるほどに求道的な姿こそが彼の円卓一の騎士なる名声を高めているのだ。

「いや、君には及ばないさ。戦場で弓を奏でる君なれば、すなわち常に鍛錬をしているに等しい」

「そんなことはありませんよ。私はただ浮世の無情を嘆き、歌にしているだけ。刃を交える貴方達こそ、戦場の花。それを謳うのは私の楽しみでもあるのです。鍛錬などとはとても」

「嘆きのトリスタン、自分のことを嘆くのは程々にするといい。私をはじめ、誰もそのようなことを思っていないよ。さて、このむくつ

けき男が隣に座っても？」

ぽろん、と頷きの代わりに弓を爪弾く。ランスロット卿は軽く体を拭い、従者から受け取った薄い外套を羽織って腰を下ろした。

暫く、旋律とも言えぬほどにゆつくりと、一つ一つ確かめるように弦を爪弾いていく。それをランスロット卿は兵たち、騎士たちの鍛錬を眺めながら聴いていた。

「ところでランスロット、イウエインの話は聞きましたか？」

「ああ、冒険の旅に出かけたよ」

「ええ。最初は音信不通になったので、ガウエイン卿も随分と心配していましたか……」

「この前、報せが届いていたな。便りがないのは良い便り、と聞くが……。彼にとっては初めての冒険の旅だった。ガウエイン卿にしてみれば無二の親友に先を越されてしまった、ということところかな？」

「なに、ガウエイン卿だつて武勇伝は尽きない。その留守を守っていたイウエインも、そろそろ自分のために旅立ってもいい頃合いではないよ」

キャメロットの騎士たちは兎角、誰も彼も冒険の旅を望んでやまない。そして風に吹かれるまま、浪漫の赴くままに旅立ってしまう。そんなキャメロットの留守を預かる両輪といえれば内政を司るアグラヴェイン卿と軍政を司るイウエイン卿であろう。

あの堅物で女嫌いのアグラヴェイン卿は冒険に出かけるタイプではない。しかしイウエイン卿は、口こそ出さないが相当のロマンチストである。人の冒険の旅の土産話を誰よりも楽しみにしていたし、嫉妬の溜め息を漏らしていたものだった。

「しかし中々旅に出られなかったイウエインも、いぎ風に吹かれてしまえば放たれた矢のようだったということですか。いやはや、流石は」

「カログレナント卿の親類と」

「噂に聞く彼の祖父、キンヴァルフ王も似たようなものだったそうで。現王ウリエン様の気苦労が知れるようです。ポロロン」

「……いま、口から音がしなかったか？」

思えば蛮族との戦も絶えぬこのログレスで、これほどまで自由奔放に冒険に出かける騎士達がいるのもアグラヴェイン卿とイウエインが頑張ってくれているおかげと言えぬこともない。であるならば、彼の初めての冒険のためにと他の騎士たちが残っているのは彼の人徳ゆえか。それとも久しぶりに普段の自分たちの振る舞いを鑑みたのか。

いやしかし恋と冒険は騎士の華。もはや宿命、使命の類。であるならば仕方がないことなのです。アグラヴェイン卿の胃が荒れて、今日も朝から牛の乳をがぶ飲みしていたのも、芋も喉を通らず麦粥を食べているのも、それを尻目にガウエイン卿が芋を潰して蒸しているのも仕方がないことなのだ。

「そういえばランスロット。イウエインの旅には道連れがいるそうではないですか」

「弟子をとったと言っていたな。弟子のために、武者修行の馬上槍試合巡^トりをしてしているらしい。従者ではなく、立派な騎士。いずれはキャメロットに連れ帰り、円卓の一員にしたいと言う程の」

「軍政家たる彼の目になかったということは一廉の騎士に間違いない。しかしですね、私少しだけ気になることがあります。恋の、狩人として」

「恋の狩人……？ それ冗談で言ってるんだよな？ そう言ってくれ頼む」

「ポロロン、ぎゅいん」

「どうやって出したその音」

「我が嘆^{フェイルノート}きの琴弓に出せぬ音などありませんが、それはさておき」

ちよつとチューニングも甘いようですが、それはさておき。

あのイウエインが弟子をとった。それはとても衝撃的な話でした。というのも彼は人当たりこそ良いですが、忙しさもあって深い付き合いをする相手には恵まれていない。無二の親友と呼べるガウエイン卿の他には、仕事としての付き合いの一線を引いている節がありました。

もちろん旧異北の国の王子たる彼は、ログレスの軍政に携わる一方で、そうやって一線を引くことで自身の立場を示しているつもりなのか。ですが、それにしても人付き合いがあまり得意でないことは確か。

そんな彼が、四六時中自身の近くに置く弟子という存在を作ったのだ。

「ずばり、女でしょう」

「……はあ？」

「彼の弟子、女騎士と私は見ます」

「何をバカな、女の騎士など」

「確かに珍しい、しかし不思議なことではありませんでしょうに。ガレスちゃん然り、女性の騎士はあり得ない話ではない」

騎士が男でなければいけない、ということはない。非常に珍しいが、円卓にも女性の騎士はいる。ガウエイン卿の妹君ではあるが、彼女は縁故ではなく己の実力で円卓の席を勝ち取った。

「いいですかランスロット、騎士の使命は恋と冒険。しかしイウエインは今までどちらにも縁がなかった。ならばどちらにも恵まれよとばかりに、春一番が吹くのも不思議ではないのですよ」

「恋の春、冒険の風とは」

「良い言葉ではないですか。まあ貴方の浮名の数々を思えばこのぐらいは」

「いや私は別に浮名などは」

ないとも言うつもりなのか、この男。

また弦がぼろろんと心の内を代弁する。騎士の欲求の体現者のような友人は女性と見れば褒め、讃え、丁重に優しさを振りまく。

「ただし」

「ただし？」

「春一番と申し上げたとおり、恋の風が穏やかなものとは限らない。彼にとつては一世一代の大嵐になるやも」

「不吉な。己のことならともかく、他人の事情について余計に思い悩み嘆くのは趣味が悪いぞトリスタン」

「それは然り。いえ、私の考えすぎならばそれで結構。それにね、ランスロット。私は別に不安や心配を抱いているわけではありませんよ」

あの獅子の如き勇敢な若武者は、戦場に立てばあらゆる困難を打ちほらい味方を助ける類稀なる将軍。故にこそ、どんな試練であろうとも最後には必ず乗り越える。

信頼を寄せているのは私も、ランスロットも一緒。であるならば数多の、冒険の風に吹かれて旅だった他の騎士たちと同様に、何も心配することなどない。

騎士の冒険とはそういうものなのである。今は遠く遙かな旅路の彼方で馬を進めている友人に、せめて幸運の追い風を。嘆きの歌ではなく、心を奮い立たせる旋律を。また私の指と弦を眺め、音を聞き、不可解な表情を隠すこともなくなった友人に微笑みながら、ただひたすらにかき鳴らす。

この城に冒険の風が絶えることはない。おそろくは、その時こそがキヤメロットの終焉なのか。そういう未来のことばかりを気にする将軍が不在な以上、白亜の城は今日も、ある意味で能天気な日常の中にあつた。

◆

首を垂れた長い葉を、雫が滴る匂いが立ち込めていた。噎せ返るような、呼吸もしづらい雨音に包まれて、風の声も聞こえない。

僕は木陰に寝かせた相棒の兜を脱がせてやり、せめて簡単に外せる部位の鎧を外し、

楽にしてやる。息は荒く、汗が蒸発しそうなくらい身体は熱いのに顔面は血の気が引き、蒼白だった。弱々しい吐息で、おぼつかない視線で僕の方を向いている。ただただ弱々しい姿は初めて見るもので、とにかく僕から平常心を奪った。

「モードレッド、苦しくないか？　何か、飲めるか？」

旅の途中だ、持ち物はそんなに多くない。一番マシに見える布を葡萄酒で濡らし、気付けの代わりに口元へ運ぶ。少しばかりの水分でも、多少は気が休まったか、荒い吐息は少しだけ落ち着いていた。

自由奔放だが主人に忠実な騎馬は心配そうにモードレッドに付き添っていた。手綱は放してやったが、草を食もうともしない。思えば疲れ知らずの馬だったが、もしかしたらモルガン・ル・フェイの魔法の馬だったのだろうか。鼻先をモードレッドの手に擦り付け、息を潜めて彼女の邪魔にならないようにしている。

「どうして黙っていたんだ。こんなに辛くなるまで、放っておいたんだ」

数日前から少しずつ言葉少なに、そして遅れがちになってきたのに気がつかなかったのは僕の失態だった。突然馬上でぐらりと傾き、何とか馬の首にしがみついたモードレッドに駆け寄ってみたら、これだ。

最初はただの風邪か何かかと思ったけれど、到底そんな程度の不調

じやない。流行病か、中毒か、もつと酷い何かかもしれない。少なくとも素人にどうにかできる類じやあないのは確かだ。すぐに典医がいるような大きな城に行かなきゃ手遅れになるかもしれない。

「・・・お前に、迷惑かけたくなかった、わけじやねえよ。でも、言いたくなかったんだ」

「何を。まさか思い当たる節でもあるのか」

「そうだ、な。分かってたよ、こういうこととしてれば、じきにこうなるってことはな。ホントはもつと早く、城に帰ってなきやいけなかつたんだ。リユネットと約束してたろ？ でも、もうちよつとは、次の城ぐらいまでは平気かなって思ってたんだけどさ。悪いな」

「どういうことだよ・・・。そうか、持病か。持病があつたのか！」

「病氣じや、ねえ。ただ単に、整備メンテの限界がきたつてだけだ」

彼女が何を言っているのかさっぱり分からない。モードレッド流の皮肉だとしたら全く笑えないからやめてほしい。

急激に悪くなった体調だが、今のところはこれ以上の悪化はなさそうだ。しかし安心はできない。医者も薬もないような状態で、現状維持に良いことなんて一つもないのだから。

本当はこのままの方が楽だろうけれど、そうしたつて治るような感じじやない。一番近い城は少し進んだところにあるはずだった。馬を引き寄せ、馬具を整える。とても1人では騎乗できないだろう。となると荷物や、重いものを全て片方の馬にまとめて、僕がモードレッドを抱えて走らせた方が良い。

「いや、他の城じやダメだ。あの城に、リユネットのところに戻らねえと」

「・・・そんなに難しい病氣なのか？」

「難しいわけじやねえ。というか、病氣でもねえ。いいから、お前がいなら戻ってくれ。今すぐ死ぬわけじやあ、ねえからさ」

「死ぬ死なないの話なら、急がなきゃダメだ。本当に、あの泉の城に戻

るしかないんだな？ リュネットじゃないと分からないんだな？」
「そうだ。ま、母上でもいいんだけど、どこにいるか分からねえし、
だったら戻らなきゃな。もともと一年で戻るって、約束してたしさ」

釈然としないが、本人がそう言っているなら僕がどうこう指図する
わけにもいかない。確かに僕も医者じゃないんだ。

荷物をまとめ、具足を脱ぎ、モードレッドのそれも脱がしていく。
魔法の鎧とはいえ、それなりに重い。本当は捨てていきたいぐらいだ
けど、そういうわけにもいかないだろう。

もう一度、丁寧に汗をぬぐってやる。あらためて見れば、年頃の女
子の体つきだった。騎士というよりは、お姫様みたいで、そういえば
見慣れた彼女の鎧姿は旅を始めてからのものだった。

できる限り薄着にしてやった方が楽かもしれない。けどこの雨に
当たってしまったえば弱っているモードレッドの体力なんて直ぐに底を
尽きてしまう。とりあえず、2人分の外套で丁寧に包む。これなら多
少は雨風をしのげるだろう。僕は濡れ鼠になってしまいうだろうけど、
大の男がその程度のことではこたれるわけにはいかない。

「おい、荷物みたいな扱いはやめろよ」

「正しくお荷物のくせに、口ばかり達者だな君は。黙って抱えられて
なさい。妙に動いて濡れたら、命に関わるぞ」

「……へっ、口が減らないのはお互い様だろうが」

「それ僕の台詞だからな、本当なら。ほらしつかり掴まれ」

華奢で軽い体を馬の上に乗せ、一先ずは手綱を握らせて、そうして
僕も馬上へ上がる。実際に一緒に騎乗してみると、抱えるというのも
難しい。なんとか収まりのいいところを探して、あとはベルトで僕の
体に括り付けた。

「痛いところは、ないか？ 平気なら行くよ」

「……大丈夫だ」

「よし。飛ばすからな。しっかりと掴まれ、とは言わない。ただ動くときは事前に言うように。うっかり落つことしちやうかもしれないからや」

「そんな時はしっかりと掴まってやるよ」

「道連れに引きずり落とすんじゃないやありません。——行くぞ」

最初は足元を確かめるようにゆっくり、やがて速く、出来る限り速く。

一年の旅路は長い。無論、あっちへフラフラこっちへフラフラしていたわけだから、一直線で帰ればそんなにはかからないだろう。とはいえ早く、出来る限り早く。

食料もほとんど置いてきた。気付けの葡萄酒と、乾燥させた果物ぐらしいか持っていない。モードレッドは食事ができる状態じゃないから、あとは僕が我慢すればいい。肌着も同然だから雨も風も遮るものなしに身体を叩くが、ええい我慢だ我慢。

「イウエイン」

「なんだよ、舌噛むぞ」

「そんなドジするもんか。……もう謝らねえ。だから、ありがとう」

「君さ、ホント、素直になるタイミングだけは間違えないよね。気にしないでもいいんだよ。師匠で、相棒なんだからさ」

「……ああ、そうだな」

「そのかわり、帰ったら話せる事情だけは話してもらおうぞ」

「ああ、そうするよ」

「出来ることなら眠っておけ。寝返りは打つなよ」

「打てるわけねえだろうが。でも、ホント、ありがとな」

丘と丘の間を縫うようにして駆ける。雨はどんどん強くなる。雷の音も、次第に近く、僕たちを追いかけてくるみたいになくなってくる。

眠ることはせず、ただ馬を走らせた。途中、眠くなれば葡萄酒を口

に含み、時々モードレッドにも飲ませた。体力が衰えてきたならば果物を噛まずに飲み干したが、やはりモードレッドは食べられなかった。

道中に何回か言葉を交わしたが、どうやら眠ることはできないらしい。意識がはつきりしているのに、鼓動は弱く、呼吸も浅い。次第に身体の熱も冷め、手を握ってみれば人形のように無機質だった。

モードレッドから、次第に人間らしい部分が抜けていく。もう今は辛そうな様子はない。でも代わりに、人間らしい様子もない。〃人形のように無機質〃だったのが、もう〃人形そのもの〃であるかのようだ。

多分これが、モードレッドが喋りたがらなかった彼女の秘密。普通の人間ならこうはならない。症状がなくなってしまうなら、それは回復したということなのに、彼女に限っては確実に状況は悪化している。

「このままでは――」

人形そのものに成ってしまうのか。それとも〃戻ってしまう〃のか？

なんとなく、彼女の秘密の正体が分かってきた気がする。喋らなかったけど、嘘もついてないけど、そもそもモードレッドは隠し事が下手すぎるのだから。ああそうだ

思い返せばヒントは多かった。

：：ええい、今はそんなこと考えてる場合じゃない。空腹と疲労と焦燥の影響が頭の中まで侵食してきている。でも彼女は逆なんだ。そういう人間らしさが全て追いついてしまっているんだ。

ただただ彼女のために急ぐ。沼を飛び越え、川をかき分け、森を通り抜けて急ぐ。もう葡萄酒もない、果物も捨て、武器以外の殆ど全てを捨てた。もう意味がないことが分かったから、モードレッドを包む外套も捨てた。

「……ああ、着いた」

もう自分が馬と一体になってしまっているのではないか。そんなぐらいわけもわからなくなってしまうてきた頃。ようやく、僕らは走るのをやめた。

何もしていないのに、湖は干上がり、城への道を開けていた。暫くその状態だったのだろう。木々も草も、風に荒らされた様子はなかった。

「モードレット——ローディーヌ、もうすぐだぞ」

もう彼女から返事はない。支える僕が揺れたからだろうか、頷くように、少しだけ頭が動いた。

幽鬼のように騎影は進む。雨はいつのまにか、やんでいた。